
グランディラファミリーの探索記

イルカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グランディラファミリーの探索記

【Nコード】

N9258Y

【作者名】

イルカ

【あらすじ】

元 ダンジョンと俗物（俺）とストーカー（少女）です

何をやらせてもとにかく変態な神様グランディラと、超脳筋バカでハーレム願望持ちのだが、なぜかグランディラ神の作るファミリリーダーのカリキ。
そんな二人を中心としたグランディラファミリー戦いの記録。
（実はそんなに格好いいものじゃありませんがね。）

タイトルと内容がマッチしなくなってきましたので変更しました。
またステータス関係も数字的な部分は削除する方向に考え直ししています。

他にご指摘を受けている第一章は大幅に改編する可能性がありますのでご了承ください。

似たような話があるところ指摘を受けております。

特に他を意識してる訳ではありませんが、関係者の方にはお詫び申し上げます。

ブローグ

「前方にオークチーフが2体POP、右からはビッグブラッドバツトが4体。ヤバイ、ヤバイよ囲まれる。」

サポートに徹してるチールが叫ぶ。

しかし前衛の俺とカルシュは今日の前のミノタウロスを相手にするので精一杯だ。

「マーリツシュ、ベルサリア、魔法で迎撃。バックスは足止め、頼むぞ。」

俺はみなに指示を出す但既に連続戦闘時間は1時間近い。そろそろみな、特に女性陣は体力の限界が近づいているだろう。

そろそろ退却を考えるべき時に来てるのかも、と思うが、まだそこまで追い詰められている訳でもなく中々決断できない。

「ダアアアア」

その時、危機に瀕すれば瀕するほど燃え上がるという難儀なスキル持ちのカルシュは一気に気合が入ったのか猛然とミノタウルスに切りかかる。たぶんスキル発動したな。

そのお蔭で長身カルシュの身長もある大剣が、ミノタウルスの堅い筋肉をやすやす切り裂き、右肩付近から右腕を切り飛ばすことに成功した。

ミノタウルスが絶叫と共に仰け反る。チャンス

「我まといしは魔を切り裂く光の雷。剣に宿りて全てを切り裂きし刃となれ」

雷を剣にまわりつかせながら動きの止まったミノタウルスに突進する。

俺の唯一使える魔法、それがこの雷エンチャントだ。

自分の剣にしか使えない、詠唱が長い、持続時間が短い、燃費が悪いと四拍子揃って使いにくいんだが、威力は絶大。

「うおお」

気合一閃、失われた右腕の箇所から一気に胴体を輪切りにする。

ちなみに今の俺ではエンチャントがかかってない状態だと、精々剣が食い込む程度の威力しか出せない。

「カルシュ、オークチーフとビッグブラッドバットに苦戦しているマリーツシュ達の援護に向かうぞ」

「待つてマズイ、後ろでミノタウルスが2体POP中だよ。何とかしないと退路を断たれる！」

再びチールが叫ぶが、その叫びには先ほどよりはるかに危機感がこもっている。

危機がピークに達している現状で、カルシュはすでにミノタウルスへ向けて走り出している。たいして俺はエンチャントの効果時間すでに終了しており、剣にまわりついていた雷は消滅。攻撃力は激減中だ。

いくらカルシュでも単独でミノタウルスを倒しきることは難しい。撤退を成功させることだけを考えねば全滅の危険性もある。

「つく、ミノタウルスは俺が足止めする。チールは魔石とドロップアイテムの回収、それが済みバックスはかく乱魔法、同時に全員退却。14層への階段まで走れ。」

俺は素早く指示をだし、身をひるがえす。

「グオラウウウウ」

直後、ミノタウルスのそれより遥かに大きな雄叫びと共に、ミノタ

ウルスの胸の急所、魔石の部分から巨大な手が生えた。2匹のミノタウルスはあっけなく消滅。
その手が握ったミノタウルスの魔石はすぐさま巨大な口へ運ばれ消えた。

「ら、ラノタウルスだと・・・このタイミングで。」

カルシュが隣で呟く。15層のフロアボスたるラノタウルス。サイのような顔と三本角を持つ巨大な人型モンスター。そう俺たちがこの場所で1時間も狩りを続けていたのは、こいつを待っていたからだ。

しかし、これはタイミングが最悪。みな疲弊しておりオークチーフなど、雑魚とは呼べないレベルのモンスターを相手にした状態。ミノタウルスを一撃でぶち抜くこの怪物と戦えるだけの余力は到底持っていない。

不味い、ホントマズイ。これは、ヤバイって。

「全員即座に退却。走れ。」

もうアイテムとか魔石とかそんなものはどうでもいい。このままじゃアレが来る。そしてまた取り返しが・・・

「はあい。オイタはいけませんよー。私”を”愛する人に近づくなんて最低ですねー。」

場違いな甘い猫なで声。

と、同時にラノタウルスの体を幾筋もの銀光が通り抜ける。

「グオ？」

間抜けな声。そしてフロアボスたるラノタウルスは振り返る事すらなく、あっけなく解体された。

「はあい。私”を”愛するマイダーリン。無事？」

その女は軽やかにステップを踏みながら、俺たちが散々苦戦してい

たモンスターを一瞬で解体していく。

流石は現在、最強の一角とみなされる女剣士だ。この華奢に見える体にどれほどの力を内包しているのだろうか。

しかし、

「やっぱりもう来たのかよ・・・まあ助かった・・・けどよ」
俺の疲れたため息が15層のフロアに染み込んでいった。

ブローグ（後書き）

初投稿作品です。見づらい所も多々出てくると思いますが、都度修正したいと思しますのでよろしく願います。

名前がおかしかったので修正
カール↓カルシュ

第一話

3時間かけてダンジョン15層から地上まで戻った俺達は入り口でいったん解散した。

俺とチールは探索ギルドへ、他のメンバーはファミリーのホームへ戻り先にステータスの更新だ。

まあ、俺として疲れきって（主に精神的に）いたのでホームへ戻りたかったのだが、ギルドの依頼を受けていた以上、ファミリーリーダーとして真つ先に報告する義務があるのだった。

ダンジョンの1層入り口からわずか30歩、重厚な石積み の2階建ての建物、表には両手剣に竜の牙を型どった意匠が施された木製扉。まるでダンジョンから街を守るような佇まい、それが探索ギルドだ。

「うーす。」

俺はその木製扉を空けつつ適当な挨拶をした。

中にいるのはむさいヒューマンのオッサンが4割、ゴツイお姉さまが1割、竜人族・獣人族・精霊族で5割といった感じだが、その大半がこちらをチラッと見ただけで興味を失ったように視線を戻す。

俺たちのファミリーはまだまだ無名だからな。

「お、グランディラファミリーじゃねえか、お前らラノタウルスの討伐受けたんだってな。どうだうまく行ったのか？」

「あの面見たら失敗だって分かるだろ。きっとまたストークマスタークイーンに助けられたんだぜ。」

「ギャハハ、ちげえねえ。ボーヤも大変だわな『追跡の剣姫』に愛されて、ギャハハハハ。」

前言撤回、俺たちのファミリー（というか主に俺）は意外と有名で

ある。実力とは別の所で。

俺はこの手合いは無視することにしてる。相手にしても良い事って何もないからな。

真っ直ぐカウンターに向かい、空いていた席に座る。

「探索ギルドへようこそ、どのようなご用件ですか？」

ギルドの受付は全員女性だ。名前は覚えてないけどな。

え？ハーレム作りたいなら女性の名前ぐらい覚えるべきだろうって？ハーレム要員じゃない女んでどうでもいいんだよ。

「依頼の報告に来了。ラノタウルの討伐、それとモンスターカラのドロップ品だ。」

そう言っただけは依頼書を懐から取り出す。隣ではチールが道具袋から魔石とアイテムを幾つか取り出している。

「確認致しますので少々お待ち下さい。」

そう言っただけアイテムをまとめて受付嬢は裏に下がる。

それを待ってたように一人の妖精族の女性が声をかけてきた。

「やあ、ラノタウルス討伐に行ってたんだって？今の様子だとうまく倒せたみたいだな。おめでとう。あれはフロアボスとしてもかなり強い方だと言う事はよく知っているよ。私もあれの討伐に行ったことがあるからねえ。」

そう言っただけ声をかけて来たのは妖精族のミリテットだった。相変わらず派手な羽を持った細い女だ。いやここまで細いと骨だな、うん。俺基準で60点。俺はもっとうる肉付きが良くて、ほらこう腰かお尻の辺りが艶かしくないと、わかるな？

ちなみに顔は80点である。頬肉が足りない。

俺があまりに全身を上から下までジロジロ観察したからだろう

「相変わらず君は無遠慮だよ。そんな目で私を見るのは君ぐらいだよ。」

ミリテットなどとは苦笑しながら、それでも隣に椅子を持つてくる。

「こ、これは『銀羽の天女』様。うわあ、間近で初めて見ました。ほ、本当にお綺麗で、です！

ああ、私は獣人族のチール。グランディラファミリーのサポートです。よ、よ、よろえ。」

「噛みすぎだ。全く、なんでこんな派手羽女に緊張するんだか。」舌を出してハアハアしてるちよつと変態ばいチールの姿（舌を噛んで相当痛かったらしい）を呆れながら俺は見る。

「私の事を派手羽女とかいうのは君ぐらいだよ。全く非常識なのは君さ。まあ今はそんな事どうでも良くてだね、ラノタウルスどうだったのさ？」

「じゃあ、派手羽&骨女でどうよ？ラノタウルスは、なんだ一瞬だったよ。超弱かった・・・うん、銀線がシュパシュパとなってバラバラだな。」

どうだ、俺の的確な表現。分かりやすkarうて。

「なんだ、またミルちゃん来たのかい。ホントあの子もマメよねえ。世にも珍しい彼女のユニークスキル有効活用とも言えるけどさ。

なんでこんな・・・まあ、顔は悪くないが、女を”褒める事”、ホント”褒める事も”出来ない、非紳士がいいんだか。となりのチールって子の方がよほど可愛い男だよ」

2回言いやがった。どうやら俺の論評はお気に召さなかったらしい。しかし、二十歳の男に対して可愛いって褒め言葉か？

なんかチールは喜んでるようだ。まあ獣人族は総じて可愛い種族ではあるな。耳と尻尾だし。

「分かったらあっち行つてろよ。えと『銀羽の天女』様？ッ」
「なぜ笑うかな、ホント失礼だね君は。神が付けたセカンドネーム
を笑う奴は、か、加護を失うんだぞ！ホントだぞ」

第一話（後書き）

主人公はバカ系です。一応ファミリリーリーダーです。でも馬鹿です。設定ちょっとだけ解説。

この世界では神様が普通暮らしていて、ファミリリーというものを作ります。

小規模ギルドみたいなものですね。

神様1人に1ファミリリー、人数はピンきりです。

神様は自分のファミリリーのメンバーにセカンドネーム付与とステータス更新を行えます。

あ、主人公の名前が出てなかった。多分、次ぐらいで出てきます
まだ神様出てこないかもしれません。

第二話

えっと、俺の目的なんだっけ？少なくともこの派手羽女の相手ではない。

「はっ、うちの神様はそんな事で加護取り上げたりしねえよ。お前の所の神様は胸小っちゃいけどな。」

が、言われたら言い返すに決まっているだろ。それが世の中の摂理ってものなのだよ。

「む、胸とか関係ないだろう、この変態が。ほんと君は人間的にダメだな。ホントダメだ。」

なぜか自分の胸の辺りを両手で隠しながら、”ホント”と”ダメ”を連発する派手羽女。こいつバカだよな、間違いない。でもムカつく、派手羽をビヨンビヨンしたくなる。

「お待たせいたしました。グランディラファミリーのカリキ様、ラノタウルスの報酬3万ギルダ、魔石・アイテムの換金が1万2千ギルダになります。ご確認ください。」

俺がどうしてやるか若干悩みつつ両手をワキワキしてる所へギルドの受付嬢が戻ってきた。

ふむ、思ったよりも換金が高い、ラノタウルスのドロップもあったからか。倒したの俺たちじゃないけど。

「ありがと、ありがと。さてチール帰るか。」

俺は現金袋をひよいと持ち上げるチールに声をかけた。

「は、はい。それでは『銀羽の天女』様、失礼します。」

あれ、こいつまだ居たの？

「今のタイミングでムシなのか？ホントこのバカは、マジバカだから。」

なんかブツブツ言ってるようだが放置した方が良さだろう。羽派手女の相手は時間の無駄である。

「じゃあな、派手羽。」

俺は一応別れの挨拶をして出口へ向かう。

「ああー、もう。いちいちムカつくんだけど、分かったわよ。またね。」

そんな声を背後に俺とチールは探索ギルドを後にした、いや、しようとした。

「はあい。私”を”愛するマイダーリン、お疲れ様。丁度いいタイミングだった？あなたはこれから暇でしょうから、私が食事でも付き合っただけでいいわよ？」

いかにも偶然のように（待ち構えてたのは間違いないが）ひょっこり俺たちの前に現れたのは、15層でラノタウルスを瞬殺した女剣士『追跡の剣姫』ことミラヴィルチェアだ。

竜人族の特徴である頭に2本と両肘に生えた角がダンジョンから出た後も凛々しさを際立たせている。

ちなみに顔は90点、若干目尻が釣り上がりすぎだと思っただわ。体付きは40点、なんつうか竜人族って苦手なんだわ。トータル興味外、残念でした。

「あー、ミラヴィルチェア。これが今回の討伐報酬の半分。一応手伝ってもらったしな渡しておく。」

俺はそう言っで、1万5千ギルダを袋から取り出し（1万ギルダコインと5千ギルダコインが1枚づつとお手軽だった）渡そうとする。

「私”を”愛するマイダーリンはそんな事にまで気を使ってくれるなんて。ほんと優しいのよね。でも大丈夫、それは『あ・な・た』のファミリーで使っでちょうだい。うちには必要ないから。」

別に俺は優しさで言ってるんじゃないやなくて借りを作りたいだけだ。そっでなくても毎回毎回・・・

「あ、でもでも、どうしてもって言うならあ、食事付き合ってあげるからご馳走してくれてもいいのよ？」

このパターンだからな。

「いやいや、今日はこの後ファミリーホームに戻ってステ更新とか色々忙しいんだよ。だから報酬受け取れや、な？」

「あらあら、ダーリンはどうしても私と食事行きたいのに、今日はダメで落ち込んでるの？なら仕方ないわね、明日時間作ってあげても構わなくてよ。」

誰もそんな事言っていない。その誘い方に落ち込むからやめれ。

「じゃあ、明日お昼の時に中央広場で待ち合わせね。じゃ、私”を愛するマイダーリン、それまで寂しいと思うけど、今日はお別れね。」

一方的に言い残して、ミラヴィルチェアは俺の目の前から一瞬で消えた。どうせ近くに隠れてこっちを観察してるんだが。そして明日は待ち合わせと言いつつ、日の出ぐらいからファミリーホームのドアの前で待ち構えているに違いない。最悪最凶の女である。

マジ怖いけど、この街でも最強の一角（個人）&最強の一角であるファミリーあの子を下手に刺激してもあまり面白いことにならない。

経験って大事だ。えーと、たぶん10回ぐらいの経験（ちなみに30回以上は経験してる）

「はあ、疲れたな。とつとと帰ろう、チール。」

「ははは、いつも大変っすね。でも、銀羽の天女様、マジ可愛かったなあ。僕もファンクラブ入っちゃおうかなあ。」

この世界はバカばかりである。俺以外。

第二話（後書き）

普人族・・・いわゆるヒューマンタイプ

竜人族・・・頭と肘に角が生えている種族、肌の色は茶色、極薄い緑
獣人族・・・動物耳と尻尾は生えてる、種類は既存哺乳類ならほぼ
網羅されている

妖精族・・・外見ほぼヒューマンだが背中に羽が浮いている（生えているのではない）耳が若干尖っている個体も

基礎身体能力的には妖精族が飛べるぐらいで、種族差はあまりない
（個人差は大きい）

スキルや魔法は種族ごとに多少偏りがある（絶対ではない）

今回は神様登場、ファミリーホームも、後はスキルとか？

誤字脱字などありましたら都度修正していきます。
指摘・感想などもお待ちしてます。

第三話

「やれやれ、毎度毎度ホームが遠いのはなんでだろうな。」

「ははは、実際遠いですからね。」

探索ギルドから疾走を初めてそろそろ20分。ようやく道程の2/3を消化した所だ。ちなみにホームはダンジョンから普通の人が徒歩で3時間（20キロ）ほどの距離にある。あれ馬車使ったほうが良くな？

「やれやれ、馬車でも買ったほうがいいな。」

「はは、馬車だと10分ぐらいですからね。ただ馬の世話は大変ですよ。」

そう、生き物は放置しておく訳にはいかない、世話をする必要があるのだ。特に馬は繊細だ、放置するとすぐに体調を崩すからね。

そんな事をグダグダ話しながらホームまでの道程を走りきった。

「やあやあ、ようやくついた。愛しのマイホームよ。ちょっとボロいけどな。」

「それ言っちゃダメですって。とりあえず入ってくつろぎましょう。」

石積みの堅牢だがちょっとボロつちい家にチールがテクテク入っていく。俺はチラッと後ろを見てからその後続いた。

「おう、おかえりだ。意外と時間がかかったんだな。」

中から真っ先に中性的で魅力的な声がかかった。

「ただいま、神様。そして3日ぶりのマイホーム。」

「いいから、玄関先で叫んでないで入ってきな。君ら二人以外はもうステータス更新終わってるしさ。」

ステータスというのは自分の器に溜まった魔水（人は魔石モンスターを倒すとそこから漏れる魔力を液体にして体内にため込む性質が

ある）に神様の神力を混ぜて能力化し肉体に還元した結果を数値化したもののことだ。

それを神様はカードに書き起こしてくれる。ステータス更新はどうやるかというと背中から手をつ突っ込んで中をコネコネされてる感だ。この行為を一般的には”ステータスを練り込む”と言う、一人10分程度。

「俺たちは”ばとるでーたー”を引き出しといて再生して楽しむついで、その褒美さ。」

との事で無償ではないらしい。が別に慣れてるし気にしていない。害ないしな。

まあ神様は超男前もしくは絶世の美女が大半、しかも多くが博愛主義（？）と最悪なので実害は多いにある、のだが・・・

「グランディラ様、先に僕のステータス更新して貰ってもいいでしょうか？」

チールは神妙な顔付きで俺に遠慮するようにおずおずと言った。

「いんじゃないかな、リーダーは最後で。ほらおいで可愛がつてやるから。」

ちなみにこの超男前で中性的なグランディラという神様は男女どちらも対応可能である。

するなよ、という突っ込みは全く効果がない。このファミリー全員・・・いやなんでもない。

まあ嫌がる奴（俺とか）は何もないけどな。ないけどな！記憶もないけどな！！

ふう目から変な汗が出てきたぜ。

「ふっふっふーん、っはっはあーん」

早く防音室のあるホームへ移動したい。マジホントニ。

「たらつらららんらん。チールはランクが上がった。」

突如、神様が大声を出した。

「っは?」「マジで!?!」「やった。」「おー」

誰が誰の反応でも別に構わないが、当たり前前の反応というよりは薄めだな。

ランクアップこれは一大イベントだ。

「神様、ホントですか、ホントにホントですか?」

「神様は嘘つけないんだよ。禁止条項だからね。ステータス書き起こすから少し待ちなつて。」

名称：チール 鍛冶っ子ちゅーちゃん

ランク：E↓D

スキル：なし↓抽鍊鍛冶士Lv1

鍛冶士の能力と共にEクラス魔石金属の生成を行う事が可能

魔法：なし

「はい、これが君の更新カードね。ちゅーちゃんって可愛くね?可愛いよね?らぶー」

らぶー、じゃねえよ。この変態神様めが。

「やった、本当に上がつてゐる。え、しかもレアスキル!?本当に?鍛冶士のレアって中々いないんですよ?ほんとー、凄い嬉しい。グランディラ様凄い、大好きですー。」

「注1：ステータスはどの神様が更新しても同じ結果が出るんですよ。」

横でボソッと呟いたのはマーリツシュだ。この顔は後輩にレアスキルが発現したんで悔しいんだな。

「まあまあ、ついにうちのファミリーにも鍛冶士のスキル持ちが出たんだ。まずそれを喜ぼうぜ。期待してたとはいえ狙って発現させたんだしな。」

スキルは個々の適正・特性・願望がなんたらで、ランクアップすることによって1つ発現する。

狙って発現する事は少ない（願望はあっても適正と特性がないと別の物になる）

からな。

魔法はランクに関係なく突如使えるようになる事が多い。こっちは性格に依存しているらしい。生涯通じて使えない人が最も多く、2つまで覚える可能性がある。

俺はスキル1つに魔法1つだ。

さて、次は俺のステータス更新だな。そろそろランク上がらないだろうか。

第三話（後書き）

ステータスはランク毎に0～100で表されます 削除しました
ランクアップは個々において何かブレイクスルーがあった時に上昇
します。

チール君の場合はラノタウルスの魔石を取り出した事がキッカケ。

次回、主人公のステータスとセカンドネーム公開予定
ストーリー（美少女）とダンジョンの出番がないな・・・
バイな神様は次回も活躍？

更新は書けた時に、ということ結構ランダムです、申し訳ありません。

誤字脱字の指摘やその他感想などもお待ちしております。

第四話

「ざーんねーんでしたー、まーたどーぞー。」
うるさい、変態神様。

ああ、ステータス更新が終わったんだが、あまり大きな変化がなければこう言ってくるたちが悪い神様だ。

俺は渡されたカードをマジマジと（というほどでもないが）見る

名称：カリキ 脳筋の鏡

ランク：D

スキル：鋼鉄化Lv3

全身の筋肉を鋼と同質に変化させる（戦闘時）

魔法：雷エンチャントLv2 『我まといしは魔を切り裂く光の雷。剣に宿りて全てを切り裂きし刃となれ』

自分の武器に雷の刃を纏わせる。効果時間3秒（賢さによって効果時間増減）

確かに残念である。15層であれだけ激闘を繰り広げた結果がこれでは少々辛い。

肝心の奴を、あれに取られたからだ。あれのせいだ、そうだな。うんその通りに違いない。

「やつぱ、15層がそろそろ無理じゃね？次は16層に行こうぜ。チールもランクアップしたし装備整えて行けば大丈夫っしょ。」

と、カルシュ。ミノタウルの腕をぶち切ったので自信を付けたな。

「えー、今回もかなり危ない所だったし、装備整えてもう一度ラノタウルスに挑戦した方が良い気がするわよ？」

とは、ベルサリア。慎重な彼女らしい意見だ。

俺はカルシユの意見に賛成だけだな。そろそろミノタウルス飽きた。

「まあまあ、それは装備整えてから考えよう。所でカリキ、今回の報酬は？」

いつもまとも役はバックス。俺がリーダーなんだが、適材適所おかしい事は何も無い。

「あー、ちゃんと貰ったぞ。いくらだっけ・・・忘れた。チール頼むわ。」

面倒なことは覚ええないのが俺の主義だ。誰も文句言わないから問題もない。

「はい、今回の報酬はラノタウルスの討伐報酬3万ギルダ、換金が1万2千ギルダでした。スキルの有効活用で魔石は置いておくべきだったかもしれません。もう少し早く覚えていれば・・・」

「ははん、カリキ君、また渡せなかったんですね。で、明日は剣姫とデートかあ、羨ましい。彼女も味見したいんですけど、せっかくだからここに呼びませんか？」

「俺は呼んでもいいが、切られると思うぞ。神様？」

あれでも彼女は身持ちが固いのだ、たぶんだけだな。ん？俺がなぜ擁護しなければならんのだ。

「はっはは、切られるのは勘弁ですね。死にませんが不死だけと痛いのですよ。切られたことありませんけど、あっはっは。」

うるさいぜ、全く。まあ神様は不老不死なのだ。

このグランディラ神はこの世界”リヨウシサーバー：エデン”に降り立ってまだ日が浅い新米神様だが、ミラヴィルチェアが所属しているイリノファミリーのイリア神は1万年以上前からこの地に実在している原初の5柱神の1柱だ。

これ以上詳しい話は良く知らないんだがな。聞いたことはある気もするが忘れた。

それに1万年ってどのくらいだ？さっぱり分からん。

「それじゃ、明日はリーダー不在って事で、他のメンバーは買い出しだな。装備全部新調するのは難しいだろうが、魔石と鉱石を3万ギルダ分買ってチールに加工させてみる方向で。カリキ、問題はなにか？」

ボックスが聞いてくるが、なぜ俺に聞くんだ？

「任せる、考えるの面倒だ。」

つぶ、これぞリーダーの資質。必要なことは出来る奴に任せればいい。

なぜみんな半笑いなんだ、面白い事でもあったか？

「よし、方針も決まったし食事にしようか。今日はカニチャーハンに八宝菜、メイン肉はグレイロサウルの胸肉醤油仕込み、後はミソスープだぞ。」

俺たちがホームで食事をする時は神様作る。こんな変態神様だが料理の腕が神クラス。いや神だが。

聞いた話だと、神様がみんな料理する訳ではないらしい。大抵見習いのEランクが作ってるそうだ。マズくね？

『我らが神と糧と生に感謝を、いただきます』

大皿に盛られて出てくる料理を小皿に分けつつ片っ端から食べまくる。

神様が作った料理といえども、食費は自分たちで稼いでいるわけだから遠慮する必要など何一つ無いのだ。

ちなみにファミリー6人と神様の7人で1食は約10ギルダ、これは一般6人家族の3日分ぐらいに相当するが、ダンジョンに潜る探検者のファミリー稼ぎからしたら全く大したことはない。

おっと、訳のわからない解説などしてる間に小皿が空になってしま
う。

「あ、ちよつと、そこ取らないでよ。私のだよ。」

そんな事は知らん、俺が食う。

「注1：バカカリキは少し遠慮すべき。そうでなくてもストーカ
ー女のせいで迷惑。」

それも知らん、オレのせいではない。だから俺が食う。

「ふふ、いつも賑やかでいいですね。あ、チール君、夜は私のベッ
トに、ね。ランクアップのお祝いを二人つきりでしましょう。」

チール顔真つ赤だな、やめろ。マジで、そんな会話すら誰もいない
所でやれ、変態神様が。

「注1：興味深い、私観察してもいい？」

マーリツシュよやめておけ、見たら目が腐るぞ。

「あーあ、私を熱く溶かしてくれる人はいないのかしら。残念だわ。」

溶かす前に凍らせるのが悪いと思うぞ、ベルサリア。チラっとかこ
つちを見るな、俺は二度とお前の相手はしない。

よし、もう周りなんて気にせず食おう、食うぞー。

++++++
++++++;

グランディラファミリーのステータス

名称：カリキ 脳筋の鏡

ランク：D

スキル：鋼鉄化Lv3

全身の筋肉を鋼と同質に変化させる（戦闘時、体力の続く限り）

魔法：雷エンチャントLv2『我まといしは魔を切り裂く光の雷。剣に宿りて全てを切り裂きし刃となれ』

自分の武器に雷の刃を纏わせる。効果時間3秒（賢さによって効果時間増減、Lvにより切れ味増大）

名称：バックス 作意の匠

ランク：D

スキル：魔力錯乱Lv2

視界内にいるモンスターの魔力器官を一時的に混乱させる（1個体1度のみ有効、Lv以上のモンスターには効果無効）

魔法：蒸散霧『水に宿りし精霊よ、その姿を熱し現したまへ』

指定領域周辺の水分を瞬間的に蒸発させ霧状し視界を遮る。効果時間3.2秒（賢さによって効果時間増減）

名称：カルシュ 危機は上等

ランク：D

スキル：危機一擲Lv4

危機になるほど力が上昇する（Lv以下のモンスターに対し先読みが付与される）

魔法：なし

名称：マーリツシュ 無情なる乙女

ランク：D

スキル：視線無視

モンスターから見えなくなる（常時）

魔法：爆裂炎上Lv2『敵対する者に無慈悲なる赤き裁きを』

モンスターの魔力を暴走させ炎上爆発させる（賢さによって威力増減、Lv以上のモンスターには効果無効）

名称：ベルサリア 凍の癒姫

ランク：D

スキル：氷結快癒Lv3

右手で触れた部分を氷結させ、その後徐々に再生する（賢さによって効果増減、Lv以上の人には効果無効）

魔法：凍結散華Lv2『卑しき者に冷たき制裁を、愚かな者に無慈悲な結果を、祖は暗く冷たき場所へ至れり』

視界範囲の温度を急下降させモンスターの魔力器官を停止、破壊する（賢さによって威力増減、Lv以上のモンスターには効果無効）

名称：チール 鍛冶っ子ちゅーちゃん

ランク：D

スキル：抽鍊鍛冶士Lv1

鍛冶士の能力と共にEクラス魔石金属の生成を行う事が可能（Lvにより扱える魔石金属のクラスが変化）

魔法：なし

第四話（後書き）

スキルや魔法にはレベルが設定されているのは特定の場所（鍛冶系統以外はダンジョン）専用です。

されていないものは生物やモンスターに直接作用しない代わりにどこでも発動します。

ベルサリアがああ時に相手を凍らせるのは別の方法（？）
気にしない方向でw

次回、あのストーカー（美少女）大活躍
ダンジョンも出ます

バイな神様は出てきません

ステータス修正しました

更新は書けた時に、ということ結構ランダムです、申し訳ありません。

誤字脱字の指摘やその他感想などもお待ちしております。

第五話　「追跡の剣姫」の日常 その1

私はこっそり分かるようにダーリンがホームに入るのを見届けた後、来る時の倍速で一氣に街へ戻る。

ほんと、全くいつも世話がかかるわね！それがまたちょっと可愛いと思うし、時々は凄く格好良いし、それに私を愛してくれる美男子だし……

おっと彼のいい所なんて考えだすと日付が変わっちゃうわ。

私は走りながら懷から通信石を取り出して呼びかけた。

「ポーリ、聞こえる？」

「はいはい、聞こえておりますよ。剣姫さま。そろそろ行かれますかな？」

「ええ、10分後に来て頂戴。」

「了解致しました、剣姫さま。」

簡単な会話で通信を終わる。サポーターのポーリとは付き合いが長い、阿吽の呼吸ってやつね。

再びダーリンの事を考えていたら、あっという間にダンジョン入り口までたどり着いた。

すでに渋い中年の大柄な獣人が入り口横に控えているのを見て少し、笑みをこぼす。

「ポーリ、ごめんなさいね。いつも面倒かけるわ。」

「お気になさらずに、剣姫さま。あなた様の専属であることを誇りに思っておりますゆえ。」

常に口調が堅苦しいのがマイナスだけどね。

「そ、そう？ありがと。あーと……準備に問題なければ行きますし

ようか。」

「問題ございません。参りましょう。」

頷くと1層に入った所で、お互い道具袋から転移石を取り出し発動させる。

転移石は双子石で、自身の片割れとなる石をダンジョン内に置いておけば、その場所まで一瞬で移動出来る便利なものだ。

使用者にしか効果がない上に使い捨てだし、フロアボスの特殊な魔石からしか作ることが出来ないためとてつもなく高価なので中級探索者には手が出ないけどね。

そうね、ん、今日ダーリンが稼いだギルダだと2個買うことはできないわね。

そんな思考の間に私たちは41層へ繋がる階段エリアに移動した。各層をつなぐ階段エリアはダンジョン内で数少ない安全普遍の場所だ。ここには何故かモンスターは侵入できないので、探索者は適性層の階段付近で戦いを繰り広げる事が多い、危なくなったら逃げこむ事で事故が格段に減るってわけ。

まあ、この41層なら私にとっては大した敵は出てこないけどね。

「あら、なんか人が多いわね。どこか大手ファミリーが遠征でもやってるのかしら？」

私は階段を下りて行くこうとして、えっと、ざっと50人ぐらいの探索者集団に出くわした。

ダンジョンは下層になるほど広くなり敵の数も増えるので、適正階層で戦うならこの人数が極端に多いという訳じゃ無いけど、人数が増えれば分け前は減る。

って理屈で少し浅い階層を少ない人数で探索する事が主流なのにな。

ん、と私が可愛く考えていると、ポーリが私に一礼して探索者の

集団に近づいて行った。ホント良くできた人だね。

「失礼いたします、皆様。わたくし”イリアファミリー”のサポーター兼錬鉱石士しておりますBランクのポーリと申します。」

そういつて今度は探索者の集団に一部の間もない挨拶を行うポーリ。セカンドネームは自分から名乗らないのが慣例だしね。

「皆様、本日はどのような要件でこの層にいらっしゃるのですか？ 場合によって、私もは層を変えますので、よろしければお聞きかせ頂けませんでしょうか？」

そこまで言つと丁寧というより慇懃無礼だね。私は思わず苦笑してしまう。

「げ、追跡の剣姫」

「え、どこどこ？ふわあ、あの人ですか。憧れの剣姫様、ああなんと美しい。」

「マジ？（チラッ）おー、ホントだ噂通りの美少女じゃん。あれがストークマスタークイーンか、勿体ねえ。」

「ちよつと、私、その呼び方好きじゃありません。やめて頂けます？」

イリアが付けてくれた”追跡の剣姫”は響きもいいし大好きだけど、この変な呼び方は大嫌い！

「ひい」

あ、いえ、そこまで怯えなくても。少々傷つく所よね、興味ないけど。

「あ、ああ、これはすみません。不作法な奴でして。ほら謝れ。」
集団のリーダーらしき龍人族の男が一步前に出て、無礼な奴の頭を押さえつける。

「いえ、分かって頂けたのなら問題ありませんわ。」

「ありがとうございます。おつと挨拶が遅れました。タツキファミ

リーのリーダーをやっております、Bランクのセルリーンです。お見知りおきを。」

「して？」

ポーリは私の方をじっと見ながら返礼してきたセルリーンの視線をさり気なく遮るように立ち、続きを促す。ナイスよ。

「我々タツキファミリーは、現在この41層フロアボス”キュバスオロチ”の討伐依頼を受けております。後2時間ほどで出るはず。今から所定位置まで移動しますので、そちらの狩りの邪魔にはならないかと思えますよ。」

「なるほど左様でございましたか。それはそれは、こちらも邪魔にならないよう気を付けさせていただきます。」

ふーん、もう前回討伐から41日経ったのか。早いわねえ。

ま、私には関係ないけどさ。今の私の目的は近々（といっても数か月先だけど）ある大遠征に備えて、この層のモンスターが落とすところあるレアドロップアイテムを手に入れる事だ。

ホント、中々でなくて嫌になっちゃう。

「それじゃポーリ。こちらはこちらで邪魔にならないように始めましょうか。」

タツキファミリーの集団に対して興味を失った私は狩りを始めるのだった。

第五話　「追跡の剣姫」の日常　その1（後書き）

フロアボスはダンジョンの各層に1匹いるボスモンスターです。

ポップ間隔が決まっており討伐後その階層の数字（15層のラノタウルスは15日後、41層なら41日）経つと出現します。

フロアボスの魔石は転送石の素材となる貴重な物のため、探索ギルドが日程を管理して魔石に報酬をかけて討伐依頼を出しています。

次回、ヒロイン無双、ステータスも公開

バイな神様は出てきません

主人公は・・・名前だけ？

ごめんなさい、1話で終わらなかったんです。

完結する予定だったので・・・

更新は書けた時に、ということ結構ランダムです、申し訳ありません。

誤字脱字の指摘やその他感想などもお待ちしております。

第六話　「追跡の剣姫」の日常　その2

タツキファミリーと別れて2時間ほど経過した。私はフロアボスのポップポイントから2フロアほど離れた場所で狩り中。

この層ぐらいになるとペアで狩りする場合、階段から離れないのがセオリーなんですけど、私からすればどこで狩りをしても特に問題ないんですよ。

「右からゴーズコンドル3匹、来ますぞ。」

ポリーが魔石を回収しつつ私に警告した。

ティラヒュドラ2匹相手にしている私はその報告を冷静に聞く。さすが集団クラスのファミリーが狩りをしてる層はリポップが早い。

私は両手に持っていた剣を左手の片手持ちにするとその剣でティラヒュドラの首を一つずつ飛ばしながら、

『我の詩に酔いなさい、刻の調べに狂いなさい、さあ汝、全なる我に従うべし』

右手をゴーズコンドルに向けて魔法を唱える。

魔法が発動した、その瞬間に衝撃波を伴うほどの速度で特攻してきていたゴーズコンドルは3匹とも空中で急停止する。

それを確認することなく、右手をまだ無傷のティラヒュドラに向かって振るう。

するとゴーズコンドルが弾かれたように向きを変えティラヒュドラへ突っ込んでいく。

それを横目にもう一つ首を刈り取った。

ズドッドッドオオオン

無傷だったティラヒュドラの3つの首それぞれにゴーズコンドルが衝突し爆発が起こる。

同時に自由になった右手を剣に添え、もう一匹の残りが一つになった首を切り落とした。

「さて、今度は出るかしらね？ポリーお願い。」

「はい、ただいま。」

私たちの狙いはティラヒュドラのレアドロップアイテムなのだけど、これがホントに出ない。

まあ元々3つの首からそれぞれ別のブレス（スキル認定らしい）を吐くヒュドラ系はアイテムを落とさないので有名だ。

『体内で相反する属性を生成するから出来にくいんじゃない？』
とはイリア神の言だけど、1万年以上、人はダンジョンでモンスターと戦ってきたのに、その生体はほとんど解明されてないのよね。
ホント謎が多い。

「剣姫さま、ダメですな。魔石のみです。」

ティラヒュドラとゴーズコンドルの遺骸をほじくっていたポリーが淡々とした声で報告してきた。

ホント嫌になっちゃうわね、いつになったら出るのよ『氷炎の凱骨』は。

ここ10日で200匹近く倒してるっていうのに、うーう、もう！ポリーはラック高いに出ないのは、私が低いからかなあ、ちよつと落ち込んできちゃう。

「剣姫さまのステータスは関係ございませんよ。サポーターである私の責任です。面目次第もございません。」

サポーターは戦闘力が低い代わりに、ラックや器用さが高く、モン

スターの遺骸から魔石やアイテムを取り出す事を主な仕事としている。

なにせ魔石をとり出さなければ遺骸は数分間に渡ってその場に残り続けるから。

モンスターとの戦闘中に足捌きの邪魔になろうものなら、それだけで致命的なことになりかねないからね。

いくら私でもサポーターなしで戦闘しようという気にはならない。

「いいえ、仕方ないことですね。少し休憩しましょうか。そろそろフロアボスが出る時間のようですし。」

ともかく、何故わざわざタツキファミリーかと付かず離れずの場所で狩りをしてるかと言いますとポーリの一言がキツカケ。

「剣姫さま、彼らの討伐はおそらく失敗するでしょう。階段付近では撤退に巻き込まれるかもしれません、留意して頂けますようお願い申し上げます。」

という感じ。”キュバスオロチ”はフロアボスとして特別強いという訳じゃなかったと思うのだけど、ポーリの忠告は聞いておくに限るのよ。

ラックより第六感に優れてるのかしら？

そうこうしてる間に、床から微弱な振動が伝わってきた。フロアボスが現れる時に感じる魔振ですね、来るようです。

邪魔する気はありませんけど一応様子みてみようかな。

「ポーリ、もうワンブロック移動して彼らを視界に入れます。付いて来なさい。」

「了解致しました、剣姫さま。」

途中のモンスターを排除しつつ見える位置まで移動していた頃には、タツキファミリーとキュバスオロチの激闘が開始されていた。

第41層（Bランクフロア）フロアボス”キュバスオロチ（認定Lv5）”

初期全長約34m、8つの首と6本の尾を持ち4種のスキルと2種の魔法を扱う

特に生気を吸い取り自身を回復する範囲魔法が強力。

また認定Lv5はBランク探索者の持つスキルや魔法のほぼ半分が無効化されてしまう（BランクでLv6に到達する魔法やスキルが少ないため）

まさに化物である。

最初はタツキファミリーが優勢だった。

50人規模のメンバーをうまく振り分け、自由に動く首と尾に対応しながら魔法を使う暇も与えずダメージを与えていた。

特にリーダーセルリンがいる集団は動きがよく、ついに首を1つ切り落とす事に成功する。

が、そこから状況が一変。キュバスオロチが怒ったのか、突如として尾から電撃を発し、残ってる首は炎・氷・毒を際限なく吐き出す。迂闊に近寄れなくなった所へ魔法が炸裂、特に体力の少ないサポーターからバタバタと倒れだしたのだ。

「あらら、これはダメね、撤退すらムリそう。・・・仕方ない私がやります、ダーリン時ほど乗り気はしないのですけれど、目の前で

全滅されても寝覚め悪いですからね。ポーリは倒れたものの回収、私の邪魔にならないようにね」

「仰せのままに、剣姫さま。」

私は返事も聞かず（了承するのが分かりきっていたから）ミスリル製の剣をスラリと抜き、一気に駆け出す。

「邪魔です、道を開けなさい！」

キュバスオロチを50人も的人数で包囲しながらもはやバラバラになりつつある陣形がハッキリ見えてきた所で私は一喝した。

「ハアアア、ヤッ」

キュバスオロチの左から約10mという所まで間合いを詰めた私は、気合と共に剣を振り切る。

剣身から白光が衝撃と共に一番外側の首に激突、いとも簡単に切り飛ばし、更にもう一本内側の首半ばまで切り裂く。

ん、少し遠かったか。相手が大きすぎて間合いが若干掴みづらいわね。

さらに3m間合いが詰まった所で今度は下から上へ切り上げ、今度こそ二本目を切断する。

そこでキュバスオロチはようやく私の存在に気付いたようだ。途端に炎と毒のブレスが眼前に迫る。

当然それを交わすことも出来るけど、それをまた狙われる事になる、そんな後手は踏まない。

「ダッ」

剣を平打ちにし広範囲に衝撃波を撒き散らすことでブレスを無効化し、さらに2m間合いを詰める。

これで一足の間合いまで到達、後は始末するだけだ。

スキル：十斬光線Lv6（光属性、斬線に触れたモンスターは切り裂かれる、Lv以上のモンスターには効果無効）

たちまちキュバスオロチの体に銀光が無数走る。一呼吸十連斬、これで終了つと。

++++++
++++++

名称：ミラヴィルチエア 追跡の剣姫

ランク：A

スキル：

- 1：愛する人の危機 心の底より愛する人の危機が感知出来る
- 2：飛剣光斬Lv6 剣先より光の衝撃波が発生する（飛距離はレベル×2m、Lv以上のモンスターには効果無効）
- 3：感謝魔吸 愛する人が心から感謝した時、周囲から魔力を吸収し魔水として貯めこむ事ができる
- 4：十斬光線Lv6 光属性、斬線に触れたモンスターは切り裂かれる（Lv以上のモンスターには効果無効）

魔法：

- 1：あなたの元へすぐ『我、片翼の元へ、繋がりし心、今』
愛する人の元へ瞬間移動する
- 2：姫の統括Lv7『私の詩に酔いなさい、刻の調べに狂いなさい、さあ汝、全なる我に従うべし』

小型モンスターを従わせ自由に扱うことができる（自分より大型のモンスターに無効、Lv以上のモンスターには効果無効）

第六話　「追跡の剣姫」の日常　その2（後書き）

スキルはランクアップすることに1つ覚えます。

Eランクから始まるのでDなら1つ、Aなら4つです。

ヒロインであるミルちゃんはユニークスキルや魔法を複数所有している稀有な子です。

フロアは12層ごとに適正ランクがアップします

1～12：E　13～24：D　25～36：C　37～48：B

49～：A

この辺りの細かい設定諸々は、そのうちまとめたものをアップする予定です（たぶん）

長くなった上に終わってないとは何事・・・

ステータス修正しました

次回、イリア神登場、ポーリ君のステータスも？

主人公は次々回から復帰予定

更新は書けた時に、ということ結構ランダムです、申し訳ありません。

誤字脱字の指摘やその他感想などもお待ちしております。

第七話　「追跡の剣姫」の日常　その3

「あゝあ、収穫はなしか。ま、明日はデートだし良いか、うふふ。」

「剣姫さまはホント物好きでございますね。」

「ふふん、羨ましのでしょ？」

「処置なし、でございますね。」

そんな、どうでもいい話をしながら私たちはホームへ戻ってきたわ。ああ、麗しの我が家・・・というほどの思い入れはないのだけれど。

「それでは、剣姫さま、ここで失礼させていただきます。」

「はい、ポーリ。お疲れ様。」

玄関口でポーリと別れた私は200人は暮らせる大きな屋敷の奥へと向かい、一際大きな扉の前にたどり着く。

「イリア、入るわよ。」

人の目がある場所ならイリア神とかイリア様と呼ぶ私だが、二人の時にイチイチそんな呼び方はしない。付き合いも長いしね。

「ミルかぁ。おかえりー。」

扉の内から腑抜けた返事が返ってくる。

「またあ、そんな格好して。私以外に見られたらどうするのよ。」

イリアは基本部屋の中で裸である。まったくデータ閲覧時にはその方が共感あがるし楽しめるけど、普段からはただのロリ痴女よ。

「いいじゃん、この部屋に入ってくるのなんてミルくらいよ。それに私が痴女だっていうなら、そっちはモブしか愛せない変態じゃん？」

「う、うっさいわね。カリキをモブなんて呼ばないで。エデンの知性体はちゃんと生きてるんだから！それに彼はカッコいいのよ、ち

よつとバカなのも可愛いし。現実世界の男なんて、男なんて・・・」
イリアは処置なし、とばかりに肩を竦める。

「まあいいわ、その件は後でジツクリ話すとして、今日たまたま4
1層でフロアボスの討伐を受けたタツキファミリーって所と会った
んだけどね。イリア知ってる？」

「む、ちょっと待て・・・ああ、これか『水谷達樹』職業はタツ
キファミリーの神、ファミリーメンバーは54人、ファミリーラン
クB。こちらに来てまだ40年か、若い神の割には頑張ってるな。」
イリアの5柱神という肩書は伊達ではない。というかエデン内でマ
スター権限を持つのは5人のうちの1人。

「なるほどねえ、情報の価値が分かってないヒヨッコさんなのかな。
イリアから忠告しておいてよ。まだあなたのファミリーが上に上が
ってこれる段階じゃない、って。」

「ははあ、また助けたのかい、物好きだねえ。そんな事ばかりやつ
てるというか死ぬよ？」

「そうかもね。でもこっちに来てもう1万年経つけど・・・
現実世界に戻る気もないし、私”を”愛するマイダーリンもいるし、
そうそう死ぬ気はないわよ。ま、どうせ死ぬならこっちの世界で死
ぬつもりだけどね。」

チートだしね、そう言っただけでイリアにウインクしてみる。だけど、現
実世界からの友達であるイリアにあまり心配かけたくないのも確か
だ。

「あなたの覚悟にちゃんもん付ける気はないのだけど、ミル。ど
うせ大遠征に行かないでって言っても聞いてくれないのでしょ？」
「まあ・・・ね、なにせ60年ぶりの49層攻略戦よ、血が騒ぐつ
てもんだわ。こういう所は枯れないのが自分でも不思議だけど。」

そういつて苦笑する。戦う事、愛される事（思い込み）は何万年経ってもきつとやめられない。

「難攻不落の49層。過去の7度の遠征はことごとく敗退、幾多のプレーヤーと『人』が敗れた悪名高きフロアボス”チゴクアシユラ”、か。あれを退ければエンディングが見えるのかしらね。」
イリアが思い出すようにポツリとつぶやく。

ダンジョンは12層毎にランクが上がる、これは長い年月かけた検証の結果分かった事だ。その一つの目安がフロアボスである。

周期的にポップするフロアボスは、周辺のモンスターの魔石を食らってパワーアップする。フロア毎に魔石総量は一定だから無限に強くなる訳ではないが、長い年月放置されたフロアボスは、その層のモンスターを全て食らいつくした状態になっている。

つまり、ダンジョン発生以後、攻略されていないフロアボスは最強状態というわけ。

更に49層はBランク対象からAランク対象に変わる（と思われる）変わり目の層、有効Lvに到達してないスキルや魔法は無力化されてしまう。

人数揃えても戦力は半減、それが49層攻略の難易度を極限まで引き上げる原因。

「どうなんでしょうね。私は別にエンディングを求めている訳じゃないから。ダンジョン無くなったらちよつと困るかも。」

「はは、それもそうかもね。あ、今度の大遠征は私も同行する事になったから。私が死なないように頑張つてよ”追跡の剣姫”様。」
ニヤツ？いえいえ、にやの方が似合いそうな笑みを浮かべるイリア。

「あら、そうなんだ。神様、しかも5柱神がモンスターにやられて消えるのを見るのもおつかもね。」

「なはは、やめてよ。あっちゃんがブチ切れちゃうわ。」

「はいはい。じゃ私は休ませてもらうわ。早く寝て明日のデートに備えなきゃ。」

冷めたイリアの視線を背中に受けつつ、それでも私は平然と自分の部屋に戻るのだった。

第七話　「追跡の剣姫」の日常　その3（後書き）

設定的な事に関しては、もう2つほど大きな物が残ってます。
しばらく生暖かい目で見て頂けると幸いです。

次回、ついにモブ認定された主人公ターン（？）

バカと変態ストーカー（美少女）のデートをお送りいたします

なぜ、登場人物が変態ばかりに・・・

更新は書けた時に、ということで結構ランダムです、申し訳ありません。

誤字脱字の指摘やその他感想などもお待ちしております。

第八話　くテートじゃない、おごるのは食事のはずだ！

「はあ・・・ふう、ああ、はあ」

「ちよつとカリキ、朝っぱらからその鬱陶しい上に勘違いしそうな溜息いい加減やめて欲しいんだけど。」

『そうだそうだ』

そう言われても勝手に出るものは仕方ないだろう。

「なんだなんだ、まゝた彼女の事で悩んでるのかい。恋煩かあ、青春だねえ。ま、私も昨日は青春ハッスルしちゃったけど！ご馳走様でしたけど！」

どおりでチールが起きて来ないはずだぜ。

「で、もう剣姫は扉の前でお待ちじゃないのかな？こんな所で、ボーーーーと溜息ついてないで早く行った方がいいと思うな。」

うるさい、だから憂鬱なんだよ。

「そうそう、剣姫さまが自分からこのホームの扉にノック、なんてイベントは絶対起きないんだから、あんた責任とって早く行きなさいよ。鬱陶しいし。」

「注1：素早い行動を求めます。リーダーならとつと行け。」

・・・俺は大声援（？）背中押されるように、仕方なく待ち合わせ場所まで向かうことにした。

僅か3秒でも、そう思う事にした。

「行つてきます。」

「はあい、おはようございますですわ。私”を”愛するマイダーリン。よく眠れました?」

ボタン

俺はドアを5?開けた所で閉めた。俺の思いは3秒すら無理だった。

「あああん、いけずですわ。」

お約束すぎる。許して欲しい。

しかし背中からは「早く行け」という凄まじいプレッシャーを感じる。

俺そんなに邪魔なのか?

・・・そこ!なぜ頷いてる?

俺は気を取りなお・・・

せないが、行くことにした。逝くことにした!

「はい、おはようございますですわ。私”を”愛するマイダーリン。よく眠れました?」

「ああ、まあな。いいか先に言っておくぞ。昼食と一緒に食べるだけだからな。自分で言い出したんだぞ、もちろん分かってるよな?」

「もちろん分かっておりますわ、マイダーリン。では、まずシヨツピングと洒落込みましょう。」

全く何も、全然全く分かってない口調だった。内容もだった。

「あ、でもでも、まずは中央広場で待ち合わせのイベントをこなさないとですね。中央広場へゴーなのです。」

待ち合わせって、どうやってするもんだった?俺の常識的で正常な記憶とずいぶん違うのだが。

と、その時、おずおず、オドオドしながらそつと俺の手を握ってく

るミラヴィルチェア。

おい、ちよつと可愛いじゃないか。まあ顔は90点だしな。ちよつと顔を赤らめたり+3点してもいい。体で減点だけだな！

「では、ゴーゴー。」

ミラヴィルチェアは俺の手を支点に軽く持ち上げると（もちろん俺を）

「ちよ、ちよつと待て、痛い。マジ痛い。」

「15分の我慢です、マイダーリン。そしたら素晴らしい出会いがいえ待ち合わせが！」

出会いも待ち合わせもある訳がない。しかもちよつと可愛いとか思ってしまった自分を許せなくなった。どうしてくれる。

俺のお願いなど完璧無視して、鼻歌さえ歌いながらミラヴィルチェアは疾走する。

引きずられてる（厳密には浮いてる）俺は素晴らしい明日に向かって、はいないけどな。ああ、肩が痛い。

15分後、ミラヴィルチェアと引きずられた俺は中央広場に到着した。

そこでミラヴィルチェアは俺をポイッと放り出すと、そのまま疾走（失踪？）あつという間に姿が見えなくなった。

のはせいぜい10秒、気付いたら目の前にいた。

「はあい、私”を”愛するマイダーリン。お・ま・た・せ。」

こういう場合はどういうリアクションを取ればいいんだ？俺の理解力は3千光年ほど追いついてこない。今ふと思ったが『光年』ってなんだろうな？

「またあ、つれないダーリン。でもいいの、会えただけで嬉しいから。」

語尾に音符が付いてた？

何故だか寂寥感を感じふと空を見上げる。二つの太陽はどちらもまだ低い場所にある。そこから導き出される答えは、

昼食まで約4時間

ということ。早すぎやね

「では、ダーリン。約束通り今日一日デートしましょ。そのために時間はたーっっっぷり空けてきたのよ。うれしい？」

ニコリと首を傾けながらの上目使いが、モンスターのしぐさに見えるぜ。

「約束は食事をご馳走する事だ。それ以外はない。」

「じゃ、買い物へレッツゴー。」

何も聞いてやしない。

ここからは記憶があいまい（ということにしておいてくれ）なのでダイジェスト

まず洋服屋へ行った。とにかく高級で有名なスキル持ちが経営してる店だ。

高い、一般人には絶対買えない（俺だって買いたくない）値段の服を2着買わされた。

買うまでに2時間かった。俺の精神は死んだ。

支出＝3500ギルダ

何故か服を持たされつつ小物ショップへ行った。
以下略、かかった時間は1時間半、おなか減った

支出＝700ギルダ

あまりに疲れておなか減ったので早めに食事する事になった。
ミラヴィルチェアが予約していたらしい超超高級で有名な飲食店だ。
探索ファミリーのリーダーが会合する時にご用達の店。プライバシ
ーへの配慮が抜群なのだが、飯は変態神様の方が断然美味い。
許して欲しい。

支出＝350ギルダ（1名様分）×2

ここで解散できると思ったたら甘かった。帰らせてくれない。

路上で冷やかに来た愚者（むしろ勇者か）が居たが、肘の角でヘ
ソの右辺りに穴を開けられていた。まあ街中だし死にはしないだろ
う。

・・・まあ、あれ、治療スキル持ちが近くにいない時は諦めて。
自業自得である。

ブラブラ露店を冷やかしながら歩いていると、当りが騒がしくなっ
た。

周りの奴らにちょっと聞いて（脅して）みると、どうやら冒険者が
珍しい動物をタイムしたので見せに来てるらしい。

俺は興味がなかったので去ろうとしたが無理だった。

小型だが火を吹く頭にドが付く生物で、確かに珍しい。絶滅危惧種
で神様に保護されているはずでは？ミラヴィルチェアは大喜びだっ

た。

俺の髪の毛がちょっと焦げた事だけを報告しておく。

支出＝120ギルダ（俺は払いたくなかった）

ようやく二つの太陽が地平線へ沈もうとして、1番月月が顔を出し始めた頃に夕食になった。味なんて分からなかったと明記しておく。ヒリヒリする。俺は変態神様の飯が食いたい。

支出＝40ギルダ

更に外泊になった。これだけは断固拒否の態度を取ったさ。

しかし怪しい薬でハッスルさせられた上に干からびる寸前だったという事は、明記する事すら憚られる。

翌朝ファミリーの連中が大いに心配・・・していなかった。

なぜ内容までみんな知ってるんだ？死にたくなる。

昼まで寝て、俺は全てを忘れた。

記憶力操作には自信がある。なにも問題はない。

第八話　くテートじゃない、おこるのは食事のはずだー！（後書き）

おバカ主人公はあらかじめ前日収入のうち1万2千ギルダを持たされています。

みんなリーダーがどのくらい使われるかは承知の上なのです。

合掌

次回、第2章突入、新たな世界へ旅立ちます

あ、準備だけかも

ダンジョンは出てきません、バイな人は出てきます

今日中にアップ出来るかな・・・

自分はそうなのですが、一晩寝ると嫌な事ぐらい速攻忘れられます。
バカってお得だと思います（そういう問題か？）

更新は書けた時に、ということで結構ランダムです、申し訳ありません。

誤字脱字の指摘やその他感想などもお待ちしております。

第一話　いざ、フィールドへ・・・って何？

「おー、ようやく起きたか。お疲れだったみたいだな。」

カルシュが声をかけてきたが、俺は何も覚えてない、覚ええない、覚えてないだつてば！だから何の事だか分らなかった。

「カリキ、みんなもちよつと話があるからリビングに集合してくれ。」

ボックスが集合をかける。

もう昼を過ぎてるのに、っは、そういえば朝も昼も食い損ねたじゃないか！！

「おーい、カーリーキー、よだれ出てるよ。」

「さっきの昼の残りがあるぜ、食うか？そうそう、俺のも一緒に食うといいらしいぜ。」

食わねえよ。あ、いや、俺のための残りの方は食うが。

「あー、カリキは食いながらでいい、聞いてくれ。と言ってもお前以外みんな知ってる事だが、まあ聞け。」

うむ、もう昼を過ぎてるのに、の後は、何で皆いるんだ、だったが話があつたらしい。

先に言えればいいものを。

「まあ、不埒な事を考えてるバカに聞かせても仕方がないんだが、改めて聞け。昨日チールに装備作らせるために街へ買い出しに行った事は知ってるな？

あ？行つたんだよ！それはまあいい。しかしだ、魔石以外の素材がほとんど手に入らなかった。ケチった訳じゃないぞ、何やら大遠征が近いらしくてな、大手ファミリー装備用の素材をに買い漁った後

で空っぽだったわけだ。」

「ほーん、それは大変だ。大遠征、だーいえんせーい。楽しそうな名前だな。しかし聞いたことあるような気けど、誰だっけ？」
俺は友達以外の名前を覚えるのはちよつとだけ苦手なのだ。

「名前じゃねえ！」「名前じゃないよ。」「注1：名前と思う思考が信じられません。」
ハモってんじゃないぜ？

「ん”ん”ん。大遠征の事はまあいい。問題は素材が無いって事だ、装備そのものも高騰気味だからとても新しい装備を買うなんて真似は出来ない。」

バックスが力説する。どうでもいい事なら最初から言うなよな。混乱するだろ。

まあ俺は友達のことじゃないって最初からわかってたけどな。

「で、だ、神様とも相談した結果、フィールド狩りをしたいと思う。はい、そのリーダーカリキ君、フィールド狩りは分かるな？」

「もちろんだよ、バックス君。分からないはずがない」

えーと、なんだっけ？あ、ほらあれだよあれ。

「注1：ヒント、神様が同行します。」

あー、そうだそうだ、買い物の一種だな。うん。

「ヒント2、怪我すると痛いよ。」

喧嘩だ！間違いない。

「ヒント3、長期遠征になるんですよ。1週間ぐらい。」

んー、そういえば最近旅行に行ってなかったな。たまに行くのもし

いだろう。

「ダメだな」「ですね」「注1：終わってます」

「んだよ、人をバカにしやがってよー。誰か分かる奴いるの？」
なぜそこで全員ジト目で見る？え、みんな分かったの？

いや、カルシュは分かってないな。目で合図きたしな。同士だ

「それじゃ、カリキとカルシュは置いていくという方向で。」

「おい、待てや。リーダーは俺だぞ、俺が置いて行かれるとかおかしいだろ。」

ワイワイガヤガヤ

「もう話が進んでいけませんので、僕から説明しちゃいますよ。」

「おう！ポーリはいいやつだな！」

流石俺の弟子だ。うんうん

「注1：弟子では全然全くありません。」

「ラノタウルスを倒すまで、16層で戦うために僕が新しい装備を作るんです。魔石と鉱石は手に入りました。まあ買ったんですけど、しかし、ベースになる素材は全く手に入りませんでした。」

「うむ、それは分かったぜ。」

俺はひとつ頷いてみせる。

「そこでフィールド、つまり5柱神保護結界の外に狩りに行く必要が出てきました。必要なものは色々ありますが、一番の重要課題は

『恐竜種』の素材入手です。」

「おおおお、つまり恐竜狩りか。なんだなんだ、最初からそう言うてくれればこんなに悩まなくて済んだのによ。全くバツカスは人が悪いぜ。いやあ、しかし恐竜狩り、くー、燃えるねえ。」

滾ってきたー、俺の中の色々が迸るぜ！

「しかしです、保護結果の外、つまりフィールドは魔法が使えませんが、スキルも対モンスター用は効果がなくなります。とても危険な戦いになります。それと神様に同行して貰わなければ出る許可がありませんが、これは了承して頂きました。」

ポーリが神様に向かって頭を下げる。

「そりゃ、もうフィールドじゃ俺ら神は不死身だからね。まあ痛いけど。その痛みも中々おつなもんだし、あの食われる感触も何度か味わうと快感に・・・」

「注1：気持ち悪話はやめてください。グロい話も。」

顔を少し青くしながらボソツと呟くマーリッシュ。妖精族の彼女は怖い話が苦手だ。怪談話とかすると本気で泣き出すんだぜ。

後で呪われるけど、な！

「神様が変態の上にマゾだと言う事は分かりました。でも私の時はサドですね。」

「なんでも楽しむ、それが神」

「まあ確かに神だと思います、いろいろな意味で。関わりたくないって意味ですけどね。」

ベルサリアの氷の刃が次々と突き刺さる。効果はないけど。

「あゝ、もう、いいですか？僕とマーリッシュさんはまだフィールド狩り未経験なんです。あまり戦力にはなれないと思います。」

でも必要な素材はCランク指定の『恐竜種』なんですよ。みなさん本当に行くんですか？」

本気で心配そうなポーリ君。

「ダイジョブ大丈夫、リーダーの俺に任せておきなさい。」

こういう時こそ、リーダーとしての威厳と度量を示しておかんな。

「それじゃ、今から出発ってことで、いくぜー。」

・・・なぜ、みんなコケてるんだ？

というか俺、飯食ってなくね？はら減ったんだが

第一話　いざ、フィールドへ・・・って何？（後書き）

フィールドでは魔法が使えません。

ダンジョン内で魔法が効果を発揮するのは周囲の魔力を使っているからなので、外に出ると魔法は使えなくなるのです。

スキルは体内の魔力を使うので発動はしますが、モンスターの魔力器官に対して効果を発揮するタイプのスキルが多く、フィールドにいる生物に効果を及ぼしません。

フィールド専門に狩りを行なっている人々が冒険者です。

彼らは魔法やモンスター用のスキルを覚えられない代わりに、友好的な生物（突然変異種）を飼い慣らし使役するタイムという技を会得します。

次回、マイファミリーはついに広大なフロンティア（フィールド）へ！

チートヒロイン（美少女）とダンジョンってなんでしたっけ？
変態神様、あんた出てきすぎ

ほぼノリで書いてます、色々申し訳ない。

更新は書けた時に、ということとで結構ランダムです、申し訳ありません。

誤字脱字の指摘やその他感想などもお待ちしております。

第二話　くいつとけ大森林く

「もちろん今日はこの後準備だぞ、出発は明日早朝な。」
なんだよボックス、ブーイングだぜ。リーダーは俺なんだぞ。

「分かってるよカリキ、頼りにしてるって。」

「注1：カリキ場合、スキルだけはフィールドで超貴重なのです。」
みなも『うんうん』と頷いている。うはは、まあリーダーだからな俺。そうと決まれば明日に向けて入念な準備が必要だ。

えと、その目はなんなんだよ？

くく翌日くく

よし、腹一杯朝食（神様作）を食ったし、みんな準備出来たら出発だな。

「よし、出発するぞ。カリキ号令。」

ボックスが音頭を取る。あれ準備の状況は確認しないのか？

「お前とカリシュに準備はチールがしたから問題ない。」

あー、勝手に荷物まとめられてるなー、俺って無意識に出来て凄くなって思ってたんだよ。

ついに発覚、犯人はチール！！

うん、ありがとな！

「よし、それではみんな、男のロマン『恐竜』退治いくぜー」
うおーーー

「注1：私は女なのですが。」「私もね」

探索ファミリーがフィールドに行くのはかなり面倒な手順を踏まなくてはならない。

ファミリー

- 1：冒険ギルドと一時契約（期間終了後自動末梢）
- 2：冒険ギルドよりのファミリーランクの認定試験^{ペーパー}
- 3：指定生物の討伐契約

神様

- 1：狩猟許可地区への転送通路使用許可証の発行申請
- 2：神器の使用許可申請
- 3：指定生物の捕獲契約

まあ、俺がミラヴィルチェアに振り回されてる間に終わってたんだけどな。

リーダーを手を煩わせないのはマイファミリーの練度がいかに高いかを表しているのだ。分かるだろ？分かるよね？

という訳で、俺たちは郊外にある転送通路（金属の重厚な建物）の前までやってきた。

え、転送ってなにかって？よく分からん。

「遠く離れた場所に一瞬で行く方法だよ。最初はちよつと気分悪くなるかもねえ。」

ああ思い出した、前使ったことあつたが全然そんなことなかったぞ。

「カリキには効かないんでしょうね。バ付いて力は強いわ。」
何の事？

「はいはい、じゃあみんな集まりなよ。触らないからねー。触って欲しい人は触るけどねー」
ドキドキとしぶしぶであるが神様の周りに集まる。

「ゲートオープン、ゴンドワナ地区ミロースへ

・・・・うん一度言ってみたかったんだよねー、特に意味はないけど」
神様はそう言うと、扉の穴に棒のようなものを突き刺す。グサッ感じだな。

特に効果音はないが扉が開き、神様を先頭に俺たちは全員通路の中に入る。

全員が中に入ると扉が自動的に閉まった。どういつ仕掛けだろう？

++++++++
++++++++

「やあ、グランディラ神。転送通路へようこそ。今日のオペレータは私が担当する事にしたよ。剣姫が愛する男を少し見てみたくなつてね。」

「これはこれは、イリア神様。ご機嫌麗しゅう。カリキはバカですが面白い逸材だと思っておりますよ。」

「ふむ、まあ今度ジックリ見物させてもらつか、一度こちらによこしてくれよ。さて申請はゴンドワナ地区ミロースゲートだったな。」

」

「はい、イリア神様。」

『よろしい、許可します。よい旅を。』

++++++
++++++
++++++

急に部屋が明るくなった。奇妙な声がする

転送承認されマシタ。ゲートオープン。ミローブスとの接続カイ
シ、ポイント022・82・165・・・固定完了シマシタ。リヨ
ウシヘンカン開始シマス

体を激しく揺さぶられる振動と共に、目の前の景色が霞む。
のようなきもの

自分が途轍もなく引き伸ばされているような感覚。

それは一瞬で収まった。

「さ、着いたよ。みんな大丈夫かなー？」

「注1：は、話しかけないでください。ぎぼちわるいです。」

「わたしもーはきそー。」

女性人に今の感覚はきつかった様らしい。

「と、とりあえず。吐くなら外でねー。掃除当番させられるから。」
神様はそういうと、真っ暗な部屋の中、躊躇なく進み扉を開けてく
れた。

「ビバ、ジュラ紀パーク、やるぜクリーチャー。ンター!!!!!!」

えと、なんですか、それ？

まあともかく、巨大な木が集まった大森林ミローブス。
俺たちのサバイバルが始まる（違います）

第二話　くいつとけ大森林　（後書き）

2章が終わり次第、創世記の話を入りたいと思います。

”+”で囲んである範囲は主人公たちには聞こえていない、という事にしておいてください。

しばらくジュラ紀のサバイバル生活続きます。

次回、いきなりピンチ？でも恐竜いないんだけど

ヒロインとダンジョンはどこか遠くへ旅立たれました（近々出ます）
真面目な神様って、ダメですね！

更新は書けた時に、ということで結構ランダムです、申し訳ありません。

誤字脱字の指摘やその他感想などもお待ちしております。

第三話　くなあ、タイムって探索者でも可能だっけ？

「キツタゾー、大森林。ユックゾー、わーれらが偉大な神のためー。」

「思わず歌を歌っちまうぜ、のカインだ。おっす。
俺の美声に聞き惚れるがいい！」

・・・なぜみんな耳抑えてる？

「この歌なら恐竜も恐れてでてこないわね、たぶん。」
ふふふ、流石は恐竜、我が美声を聞くだけで力量の差に気付きおる。

「注1：その口を閉じてください。気持ち悪さが三倍増しです。
ついでに憎しみも。」

はっはっはー、何を・・・いえ、すぐに閉じさせて頂きます。

「さて、ミニリーダー範囲には恐竜はいないみたいだねえ。どっち
に行こうかな。」

僕としてはこの広大な大自然の中、全員裸になつて戯れる&森林浴
をオススメするよ。」

神様はたまに意味の分からないことをいう。変態神様だから仕方ない
けどな！

「とりあえず、このゲート、とかいう建物周辺を野営地にして辺り
を探索してみるのがいいだろうな。」

まだ日の出から間もない時間とはいえ、初日から野営地探して彷徨

「うような事態は避けたい。」

「そうだよバックス、俺の言いたかったのもそれ。この案は、速攻反対なしで可決された。」

俺とカルシユは背負っている巨大な瓶を下ろして、中に入れてる野営地作成道具を当たりにぶち撒ける。

「リーダーのカリクとカルシユに一番重要な仕事を任せるぞ。水の確保だ。神様、この辺りに水源はありますか？」

「あるよー、ここから東に300mほど行くと川がある。んー、水辺には小動物とかいそうだけど、二人に任せれば問題ないね。」

「迷子になったら後ろから襲いに行こう、うふふ。フィールドの魔術師、不死無敵のグランディラの全てを見よ！」

「絶対無用。探しに来るとかマジヤバ。」

「俺とポーリは角材の確保な、木はそこいらの斬り倒せばいい。女性二人と神様は布を伸ばしたり貼り付けたりしといて下さい。ゆっくりでいいぜ。」

《了解》

みんな一斉に動き出す。リーダーたる俺の薫陶が行き届いてる証拠だな。満足であるぞ、うむ。

「ところで・・・東ってどっちだ？」

「そんなに冷たい目で見るなよな。北向いてスプーンを持つ方って言われればすぐ分かったんだよ！」

「注1：絶対分かってませんね。あっちの方です。」

「指差し確認よし、さ行ってくるぜ。」

「おーれたち、道なき道行く冒険たーい、恐れるものなど何もない。」

カリシュと二人で真っ直ぐ進む。木を切り倒し、草をかき分け、とにかく真っ直ぐ進むのだ。

「うおお、何だアレ。」

20分ほど進んだ所で、突然何かを見つけたカリシュが叫んで上空を指をさす。

ん？なにになに？

見上げると鬱蒼と覆い茂った葉の間から青い空が見える。と、チラリと何かの影が横切った。

遠いしよく見えないのでイマイチ分かり辛いがたぶんデカイ、何だありゃ。

「何が飛んでるんだろう。バット系じゃないかな？」

カーバ、バットとかダンジョンモンスターだろ、外にはいないってバツカスが言ってたぞ。

ふふん、と胸をそらす。俺は今日のために昨日バツカスから色々教えてもらったのだ。

「じゃあ、何？」

あーえー、多分アレだ。ほらあれ。

なんとかサウルスとか、なんとかドンとかいうの。あ、あいつ恐竜じゃん。

「おおおおー、アレが恐竜なのか。恐竜は飛ぶのか、飛んでるのか！凄いな。」

うむ、恐竜は凄いのだ。強いし。だから素材の価値は高い。
しかし、今は準備不足だな。水汲みをするために先へ進もう。

「あいよ。アレと対決するのが楽しみだぜ。待ってるよ、なんとかサウルスとか、なんとかドンって奴よ。」

よし、その意気だぜカルシュ。士気も高まったし進むか。

俺たちは再び道無き道を進みだす。その進軍速度は士気向上により
1.5倍（当社比）だ。

「巨木を一刀両断し、草は微塵切り、結構大きな虫を蹴り飛ばして
進む進むぜ俺たちは」
うむ、調子出てきた。

更に10分ほど進むと急に視界が開けた。お、大森林もう終わり？

「カリキ、川あったぜ。これはデッカイなあ。」

確かにでっかい、そう眼前には向こう岸が見えないほどの川があった。

おお、一面水とか絶景かな。

よし、瓶に水を汲んで買えばミッシェンコンプリートだぜ。俺は
受けた依頼は必ずこなす！

あ、依頼じゃないけどな！

別に恥ずかしく無いぞ！！

「あー、この水冷たくて気持ちいいぜ。すっごい透明感あるしよ。
フィールドってすげーな。」

うむ、フィールドは凄いのだ。スケールが違うんだぜ。参ったか。

「あつう、うおうおうおお。なんか、噛んでる、噛まれた~~~~」
カリシユが急に変な踊りをし出した、と思ったらそうではなかったらしい。

手になんか赤くて大きなものがぶら下がってる。あれ、なんか見たことあるな？

「いたいた・・・痛くはないけど、なんだこれ？」

冷静になると痛くはなかったらしい。カーバ。とりあえず取ってやるう。

ブチッ、ポイ

おい、カルシユ、すっげー血が出てるんだが・・・

「うわ、なにこれ、何だこれ、止まらねえ、うほうほ。」

あー、なんだっけ、ピル？キル？・・・何でもいい、血を吸う生物だよ。それ中々血が止まらなかったんだよなあ、うんうん。

「うぎゃー、このまま死ぬ、俺死ぬの？どうしよ、どうしよー。」
そりゃヤバイな。ベルサリアの所戻ってスキルで治して貰って来いよ。

ほら邪魔なもん全部ぶっ倒してきたから、走っていけばすぐだぜ。

「分かった、治してもらったらすぐ戻る。フィールドこえーよ。」
カリシユは猛ダッシュで走り去った。

うむ、油断したな。ポーシヨンぐらい持って来るべきだった。
思いつきもしなかったが反省しよう。

つかさ誰か言ってくれよ・・・

あれ？昨日バツカスが言ってたかも？

ははん、気のせいだな。

さて、カルシュが戻るまで何しよう。

あ、さっきの変なやつ、うん多分ビルとかいう名前だった。
あれ観察してみるか。食えるかもしれないしな。

・・・？

なんか小動物が一生懸命食ってるんだが、おい、こいつは俺が仕留めた獲物だぞ！（仕留めてません）

「うきゅ？」

そいつは、チラリとこちらを見た。

うむ、見たこと無い生物だな。なにこいつ生意気

第三話　くなあ、タイムって探索者でも可能だっけ？（後書き）

ニューキャラ登場です、たぶん。

ダンジョン内には魔力を吸収するモンスターはいますが、吸血生物がいません。

なので、ほとんどの探索者はヒルが何してるか理解出来ないのです。冒険者は当然この辺りの知識は豊富です。

次回、女性陣が大興奮してあんなコトやこんなこと（予想ついてますよね、ごめんさい

ダンジョンとヒロインは（以下略

変態神様も大興奮で色々ドバドバです

今後恐竜が出てきますが色々ファンタジーですのでお間違えなきよう。

更新は書けた時に、ということで結構ランダムです、申し訳ありません。

誤字脱字の指摘やその他感想などもお待ちしております。

第四話　く俺、なんか忘れてる？

おい小動物、それは俺のだ勝手に食うな！

まあ、見た目あまり美味そうではないけどな。

小動物は、さつきチラリと俺を見て以降、カルシユの手に吸い付き俺が仕留めた（偽造です）

赤くて大きい芋虫みたいな生物を一心不乱に食っている。

「るうう、うるうう」

小動物は喉まで鳴らして上機嫌だ。え、実はメツチャ美味しいの？
美味しいのならこんな小動物にはもったいない。俺が食わねば！

「る”う”う”う”う”」

小動物は俺の変化を敏感に感じ取ったのか、こちらを向き鳴きだす。
一丁前に威嚇か？ん？

いいぜやってやろうじゃないか。

俺は取っ捕まえてやろうと右手を伸ばす。

ふん、こんな雑魚っぽい小動物に武器を抜く必要など無いわ、うは
ははは。

「う”るうう”お」

小動物は大きく吠えたと俺の伸ばした手に向かって飛んできた、つか噛み付いた。

小動物が俺の手首辺りをガジガジ噛む、全然痛くない。
まあスキルが発動して俺の皮膚は鋼になってるからな。

ふむ、このまま叩きつけてやろうとかなと思いつつも、小動物を観

察してみる。

大きさは両手で抱えるぐらいか。生まれたての赤子といった所だろう。

体は丸っこい、黄緑の短い毛が生えてるが密度は薄め。下の肌はガラガラしてそうだなあ、肌の色は白っぽい。

首は短く顔はオーソドックスな・・・ほらえとあれだ、ほらあれな感じ。わかるか？迫力はあまりない大人しい感じのやつ・・・ああ恐竜のな

歯はそこそこ鋭いんだろう。赤くて大きいものの肉を簡単に噛み千切ってたわけだし。

まあ俺の手はムリらしいから、こいつのレベルは3以下か。つぶ、そりゃそうだな。やっぱ雑魚。

前足が2本に後ろ足が2本。うむ、普通だ。

背中には羽が4枚。4枚？

・・・尻尾は2本？さらに2本の尻尾がすげーウネウネしてる。

なんだこの小動物は、少なくとも抜群の記憶力を誇る俺の記憶にはない。

少なくとも昨日のバックス解説の中にはいなかった・・・いなかったよね？

噛まれてる手首は全く痛くないが、ガジガジガジガジやられているのでちょっとウザイ。

ひっぺがそうと思って、左手で小動物の首の辺りを掴んで引っ張る。

取れない

さらに力を入れて引っ張る。

全く取れない、なんだこれ？

「う”う”ううう」

小動物は必死に噛み付きながら喉を鳴らしている。俺を噛んでその上威嚇か？

全くダメージにならないくせに小生意気だ。

グイグイ引っ張る、でも取れない。

いい加減、頭に血が登ってきた。それでも沸点の高いほうだが我慢の限界も近い（低すぎです）

剣でプスツとやるか。うんそれがいい。

そこまで考え、左手に剣を持つとうと悪戦苦闘していると（左腰に挿してあるので左手で抜くのは難しいのだ）

カルシュが戻ってきた。見るとまだ手は凍っている、完治する前に戻ってきたらしい。

「お、カリキいた。戻ったぜ。」

おう、お帰り。ケガは大丈夫か？

「ベル姉にすっげバカにされた。水辺の生物には気を付けろって散

々言っただろってさ。俺聞いてないのに困るぜ全く。」
俺も何も聞いてないぜ、ホント先に言っただけだよな！

「だよな、だよな！。でさ、さっさと水汲んで帰って来いって。寄り道絶対するなって言われた。ベル姉こえーよ。」
俺もブルブルしてきた。早く帰るか。

カリシユが素早く自分と俺の瓶に水を汲んでくる。俺はそれをヒョイと担ごうとして思い出した。
手に噛み付いたままの小動物をだ。しつこいな、どうしよう？

「お？カリキ。なんだよそいつ。噛まれてやんのバーカー。」
噛まれたのはお前が先だろうが、カーバ。

「んだよ、俺はカバじゃねえよ。つか、そんな事はどうでも良くて、早く帰らないとベル姉に怒られる、走ろうぜ。」
おう、そうだな。どうでもいいことは後でいい。

俺とカリシユは瓶を担ぎ疾走する。
来る時に木と草を全部処分したお陰で、数分のうちに野営地へ帰りついた。ただいまっとな。
おー、だいぶ出来てるな。

「おう、カリキ戻ったか。遅かったな。」
と、バックスが声をかけてくる。うむ、カリシユが赤いのに噛まれて時間を食ったのさ。

「そうだったな、昨日ヒルには気をつけるように言っただけがあ。あれに噛まれると血が止まらなくなっただけ危険だ、つたのによ。所

でカリキ、それ、なに？」

ボックスに指さされて俺は自分の右手を見た。

・・・おおう、こいつまだ噛み付いてたのか！痛みも何もないからすっかり忘れていたぜ。ホントしつこい奴だな。

俺は右手をぶらぶらさせてみる。

やっぱり取れない。

なあ、ボックス。こいつなに？取って欲しいんだが。

「うゝむ・・・んゝ・・・ツンツン・・・何だ、このへんてこ生き物は？俺も知らないな。」

「う”るうう”う”

「なんか鳴いてるな」

おう、鳴いてるな。さっきからずっと鳴いてる。

「ちょっと待て。神様ゝ、みんなゝ、ちょっと集まってくれ」

ボックスが集合をかける。みんなが来る前に俺は背負った瓶を下ろした。大して重くはないが邪魔だしな。

小動物は取れない。

すぐにみんな集まってきた。集合早いぜ。さすがマイファミリー（以下略）

「ボックス、どうしたの？またカリシユが流血でもした？」
カリシユの手はまだ凍ってるんだが。

「注1：布の仕上げ最終段階だったのです。」
マーリツシユちょっと怖いで、そんな密かに怒らなくても。

「なんだ、僕の裸を見なくなったのかい。遠慮せずに言ってくれれ

「ずっと裸でも構わないが、どうだ？」
「どうだとかいう以前の問題だ、変態神様。」

「あゝ、なんだ。カリキの右手見てくれ。」
みんなが一斉に俺に注目する。こういうときはリーダーの威厳が大事だ。しっかり胸を逸らす、そしてスマイル！
・・・誰も俺の顔なんて見てなかった・・・

「そのへんてこ生き物、誰か分かるか？」
俺は分らん。小動物で十分だ。早く離れるよな。

「きゃー、何この子。なにになに、かわいいー、ねね、何この子なにこのこー、どこで拾ったのよ、ナイスよ。カリキの初手柄だわ、ナイスよ」

「注1：な、な、なんですか、何なんですか？ドキドキ、触ってもいいですか？いえ、むしろ触ります。ナデナデします。は、っは、はやくその汚らしい手からこの子を自由にして下さい。今すぐ抱っこしたいです。」

興奮しすぎだ。呼吸が怪しいぞ。
つか取れない。

でも、小動物が何者かは分からないらしいな。そうだろう、小動物だし。

「ふーん、ほほー、データー致なし。私の裸よりはオリジナリテイに欠けますがね。私をブラブラさせてみましょう。」
脱ぎだすな、変態神様。

「冗談ですよ、しかしこれは・・・ほほーん、もしかして、むむむ。」

何その悩んだ表情、俺がちょっとドキツとした、だと？

「ふむむむ、私が全身舐め回すのも一つなのですが」
「なんでだよ！？」

「カリキ、今”鋼鉄化”使ってますね？解いて下さい。」

あー、攻撃認識したら自動的に発動するからな、凄いだろ。

って、今解いたら俺の手ガブウって血ドバドバーってなんじゃないの？

さっきのカーバカリシュみたいに。

「なるでしょうねえ。」

ヤダ

「でも解いて下さい。じゃないとこの子おそらく離れないよ？」

マジか、マジですか？

「はい、マジ。だいじょうぶ、ベルちゃんがすぐに治療してくれます。ちょっと冷たいですけどね。」

嫌だな、いやだなあ。ベルサリアがニタニタしてるし。

しかし、神様がああ言ってるし、男リーダーカリキ、覚悟を決めるぜ！

うぐう

意識的にスキルを解いた俺の腕に小動物の歯が刺さる。もちろん痛い、血も滲むし最低だ。

「らるう”~~~~う~~~~」

しかしそれは一瞬だった。小動物は嬉しそうに一声鳴くと噛むのをやめて手から離れたからさ。

うっし、俺大勝利！（勝ってません

「やっぱり、タイム。それにこんなゲートの近くで突然変異種に出会うですか、全く・・・」

第四話　く俺、なんか忘れてる？（後書き）

脳筋バカは色々最強ですね。

可愛い鳴き声って思いつきませんでした、すみません
冒険者に一時登録してあるので、その間にタイム覚える可能性はあります。

探索者のカードには表示されませんが。

ご都合主義ですみません

次回、小動物に名前が！？つかそろそろ恐竜の定番

ひろいん（以下略

神様、思ったほど暴れてませんね、そろそろハツチャけるよ

更新は書けた時に、ということで結構ランダムです、申し訳ありません。

誤字脱字の指摘やその他感想などもお待ちしております。

第五話　彼の者の名前は？

「うるううう」

小動物が嬉しそうに俺の周りをグルグル回っている。

なんとなくムカツとしたので鼻の頭をペチッと叩いてやった。

「うきゅう、らう」

なんか抗議してるらしい、生意気な。お前のせいで俺はケガをして痛い目にあつたんだぞ！

ドカツ

いきなり背中を蹴られて俺は顔面から地面に突っ込んだ、一体なんだよ、つか誰だよ。

「なにーやってんのよ！カリキ！！あんた一回死ぬ、死ぬの？死にたいん？」

えと、ベルサリアさん、何を怒っておられるのですか？その顔怖いです。

美人なだけに超怖いです。

「注1：こんな可愛い子を虐待とかありえません。私が殺します。」

やだなあ、マーリツシュまで、ちょっとしたスキンシップじゃないっすか。

冗談ですよ冗談。

こえー、思わず敬語になっちまうぜ・・・

チツチツチ

「ほらほら、そんなバカの所に居ないで、こっちおいでーねー。」
一転、ベルサリアが愛想よく小動物に呼びかける。俺にもそのくらい優しくしてくれても良くね？
っひ、なぜ睨む。

ベルサリアとマーリツシュの方へ小動物がトトテという感じで歩いて行くのを見ながら、俺は世の中の理不尽を嘆いた。

「でも自業自得ですよ。」

おい、ポーリどういう意味だよ？

「注1：カワイイ・・・でも不思議な手触りです。毛はサラサラなのにひんやりしてて、しかもなんかひんやり金属、みたいな？」

「ホント、ホント冷たくて気持ちいいー。私、ネズミぐらいしか生きた生物触ったこと無かったけど、こんな感触の生き物もいるんだ。」

女性二人がキヤイキヤイ言いながら小動物を抱き上げたり撫でたりしてる。

おい、ベルサリアの胸に埋まってるんじゃないやねえぞ。俺にも触らせろよ。

「ふむ、やはりティムで間違いないですね。カリキ、その突然変異種の名前決めましょう。」

ん？名前？そんなのどうでもいいよ。神様が決めてくれよ。

「私ではダメですよ。この突然変異種をティムしたのはカリキ、君だよ。うん、決めたら僕がご褒美に突っ込んであげる。」
何をだよ、この変態神様、いらねーつつつてるだろ。

・・・で、ティムってなんだ？

どうやら周りの様子を見るに、分かっているのは神様だけで他は全員詳しく分らないらしい。

みな興味津々な目で神様に注目する。

「ふむ、そこからか。面倒ですねえ。誰かを愛でながらしかやる気が起きません。」

よしポーリ、ゴーだ。

・・・まあなんだ、嬉しそうに行かれるとリーダーとしても人としても複雑なだけだな。

「ふふふ、いいお尻、後でじっくり料理してあげますからね。」

ダラシナイ顔で撫で回す変態神様と嬉しそうに尻を振るポーリ。
一生見たくはなかったぜ。

「ティムというのはですね、探索ファミリーには縁のないものです
が、簡単にいえば生き物と友達になるスキルです。そして友達にな
った生き物に名前をつけるとファミリーメンバーとして登録できる
ようになるんですよ。」

えーと、ようはこの小動物に名前を付ければファミリーのメンバー
に出来るってことか？

でも、こんな小動物ファミリーに入れてなんの意味があるんだよ。

「カワイイは正義、マスコットとして置いておくだけでも意味があ
ると思うわ！」

「注1：そうです、絶対にファミリーに入れるべきです。」
って言われてもな。俺はこの小動物好きじゃねえし。

「まあ、最期まで聞きなさい。本来なら中規模の冒険ファミリーならティムメンバーが居るだけで周囲から羨望の目で見られるほど幸運なことなんですよ？」

ほほー、まあうちは探検ファミリーだから関係ないけどな。

「はあ、まあいい続ける。ああ、いい感触。」

前触ってんじゃねえ、マジキモイ。おいポーリ、こんな所で出すんじゃねえぞ。

「ティムできる生き物が非常に稀です。突然変異種と呼ばれる少々特殊な生き物だけが対象となるからね。」

さっきから言ってる突然変異種ってなんだよ？

「生態はよく分かってないよ。ただフィールドで突発的に出てくる生き物の事だね。この突然変異種には幾つかの特徴があるんです。」
ほうほう、特徴って4枚の羽と尾が2本あることか？

「そういう身体的な特徴も一つだね。んー、ほら立ってきた、つくつく。」

や・め・ろ。二人っきりの時に勝手にやってくれ。

「ああ、なんだっけ。僕も滾ってきちゃって。そんなに睨まないで、僕が先にいっちゃうからあ」

ポーリ以外の全員から睨みつけられてもなんのその、変態神様すぎる。

「とつとと進めろ、変態！・・・の神様」

さすがのベルサリアも呼び捨ては不可能でした、まる。

「突然変異種の特徴ね。まず知能が高い、人ほどじゃないがある程度言葉を理解出来ることが多い。それに魔力適性がある。あー簡単に言えばダンジョンでステータスアップするリンクも上がる。スキルや魔法も覚えるみたいだね。」

はん、この小動物がスキルや魔法覚えんの？うつそでー、シヨボイ噛み付きぐらいしか出来そうにないし。

「神様、質問があるんだけど、フィールドの生き物って魔力持っていないですよ？でもこいつは少量だけど持ってる。だから突然変異種なんですか？」

バツカスが至極真面目な顔で変態神様に聞く。

「ああ、そういう言い方も出来るかもね。続けるよ、突然変異種は稀にティムスキル持ちの血、というより魔力を体内に取り込んで契約することがある。僕も条件はよく知らないんだが・・・カリキ何か心当たりはない？」

あん？条件？そんなの知らん。そもそもティムスキルってなに、俺持っていないし。

「ああ、普通に聞いたのが悪かった。この生き物に手首に噛み付かれる前、何かなかったか？」

む、ん？確か、あれは、カーバカリシュが赤い変なのに・・・

ああ、小動物は俺が仕留めた（偽造です）赤くて大きい芋虫みたいな奴を勝手に食った、思い出したぞ小動物、俺の食いもん返せ！

「らう”うるう”」

む、シラを切る気が生意気な。

「ああ、多分それだね。この突然変異種は美味しい餌を与えてくれたカリキと契約する事にした、って所かな。」

「うるうるうる」

「注1：そうだって言ってます。」

ホントかよ？しかし、俺はこんな小動物よりアレを食ってみたかった。もう一度川に行けば取れるかも！

「ああ、それはジャイアント・シグナルヒルだね。猛毒だから食べたら死ぬ。」

うほい、マジかよ。やべえ。でもこいつスツゲ美味そうに食ってたぞ。俺が食おうとしたらなんか怒ってたし。

「多分カリキが食べないように守ってくれたんだね。偉いね、うんカワイイ」

ベルサリアが小動物をグツと抱きしめる

ああ、ベルサリアの胸、羨ましい。フニフニしたい。本番は勘弁ください。

「それでは、長くなったんだけど、カリキがこいつに名前を付ければ、うちのファミリメンバーになるって訳。」

なるほど、頭の中が一周して何言われたか忘れたが、名前をつけるんだな。

それじゃあ・・・見た目で決めて・・・4枚羽 でいいな。

「ダメー、絶対ダメー。バカなだけじゃなくてセンスゼロとか最悪なんだけど。」

「注1：まじめに考えて下さい。殺しますよ。」
怖いよ、冗談じゃん。

「注1：絶対本気でした。」

そ、そんな事、ないぞ。ああ、分かりましたって。

じゃあな……

……

……

オーリンティス

……

《ほほう、太陽と月を司る創造神の名前から取りましたか。ま、彼はこの程度怒りはしないだろ。》

「お、カリキにはいい所ついてくるな。俺は賛成。」

「僕も賛成です。なんかシツクリします。」

「ま、悪くないわね。今度ご褒美あげてもいいわよ?」

「注1：オーリンティス……オーリンティス!」

一人反応しないのは寝ているからだ、話が分からなくて寝たらしい。

「ルウルウウルウ……」

「注1：この子も気に入ったと言っています。」

ホントか? まあいい、じゃあ決まりな!

「よし、決まった所で、僕はポーリくんとちょっと用事ができた。後は頼むよ。」

おい、どこでする気だ。・・・青姦とかポーリの運命はいかに！？

放置するしないな。うん。

第五話 彼の者の名前は？（後書き）

突然変異種で有名なのはドラゴンです。

一章のデートで出てきたドラゴンがそうですね、あれは火竜でした。ともかく新しいメンバーが加わったファミリーの明日はどっちだ？

名前一つで大騒ぎ、長くなりすぎて恐竜出せませんでした、申し訳ない。

次回、ようやく恐竜お目見え、オーリンティスの実力やいかに？
神様大暴走です

更新は書けた時に、ということで結構ランダムです、申し訳ありません。

誤字脱字の指摘やその他感想などもお待ちしております。

第六話 ｖsディロフオサウルス その1

結局、この妙な小動物オーリンティスと変態神様のせいで野営地の設営に午前中いっぱいかった。

食事の担当は神様のはずだったが、疲れたのでパスとか嫌がらせ以外の何ものでもない。

オーリンティスはその辺りで小さい昆虫を食べていた。赤いの食べてたことといい肉食？

ちなみに、オーリンティスがなにか捕まえたりすることに女性二人が

「えらーい。凄いねカワイー」

とか

「注1：中々ですね、ヨシヨシ」

とか大騒ぎするのは一体どうなんだよ。男衆は冷めた目で見守るしか無かった。

「さて、午後からの予定だが、獲物を探すのが先決だ。神様の話ではこの辺りに恐竜はいないみたいだから、まずは川に沿って移動しようと思う。」

食事が終わってバックスがそう切り出した。ちなみについさっきバックスをサブリーダーに任命したんだぜ、俺が。

「そうね、適当に移動して迷子になっても困るし、それでいいと思うわ。」

「注1：リーダーが慎重な人だと安心します。」

あれ？リーダーは俺ですよ？

・・・なぜ、また睨む。

「リーダーはカリキだよ、俺にはムリ。だが面倒事はサブリーダーが負うもんだ。リーダーには戦闘で活躍する使命がある。」

そう、その通り！

「とにかくだ、ここら辺りはそこまでDランクより上の恐竜でないはずだが、装備はしつかりな。神様ですよ、裸とか絶対やめてください。」

「えー、それは残念。恐竜に僕のを魅せつけてあげようと思ってたのに。」

そんな事、変態神様以外は思いつきもしねえ。

それぞれ装備を整えて準備をする。俺も含めて装備はずいぶん磨耗してる。

手入れは欠かさない（ポーリ）が、金属も魔力も少しずつ失われていくのは避けられない。

そろそろ俺の剣とかヤバイんだよ、この狩り中は持つてくれればいいが・・・

チラッと見ると、神様が見た事のないアイテムを肩にかけていた。長い筒のような物だ。

「ああ、これ？これは魔力を持たないフィールドの生物にのみ効果がある、バリラン・ツインショット・ライフルって遠距離用の神器だよ。」

おお、これ神器ってやつか。神様しか扱えない特殊アイテム。初めて見た。

「私も始めてみます。変わった形ですね。」

「ふわー、これが世界で数名の鍛冶士しか作れないという神器かあ。凄いです。僕も作れるようになるかな。」

「注1：Dランクになった時にユニークスキルとして出ないと無理だと聞きました。」

うわ、ポーリの奴、凄いガツカリしてる。レアスキルなんだから良いだろうに。

「よし、出発するぞ。先頭はリーダーカリキ。」

おう、任せておけ。

「次にカルシュな、三番手の真ん中に神様、左右にベルサリアとマ
ーリッシュな。」

「はい。」

「注1：分かりました。」

「その後ろにポーリ。左右に気を配って何かの時はベルサリアとマ
ーリッシュの盾になれよ。」

「わ、わかりました。」

「最後尾は俺な。それじゃ行くぞ。リーダー掛け声を。」

任せとけ！

みんないくぜ、恐竜退治だ！！！！

《おー》

まず、さっき水を汲んだ川辺まで移動する。

小動物はてつきり置いて行こうと思ったんだが、俺の気付かない間

に背負っているカバンに張り付いてた。

なんで分かったかって？女性二人が妙に騒がしいと思って後ろを見たら小動物の顔が見えたのさ。

まあ良いけどよ。

「船がないとここを渡るのは無理そうだね。水中は僕のレーダーにも映らないから危険度分らない、まあヒルは確実にいるようだし。僕は血を吸われても全然いけど、どうせ吸うなら下半身にしてくれないか？」

なんで吸うことが前提なんだよ、変態神様が。

「とりあえず、予定通り川沿いに歩くぞ。神様何か注意事項ありますか？」

「そうだね、あまり水に近い場所は歩かないこと。水中に肉食獣が隠れてる可能性、というか確実にいそうだから。」

ふうん、水の中にもヤバイ奴がいるのか。対決するのもいいかもしれないな。

「よくねーよ。そもそも鎧来て水中に沈むつもりか？」
そうか俺泳げないな。うむ諦めよう。

川沿いに歩き出して20分。右手に川、左手に森林と全然代わり映えない景色が続く。

時折水面が揺れたり、木の葉がガサガサ音を立てるが、何もでない。

暇だなあ。歌うか。

「やめろ、絶対歌うな。」

「歌ったら殺すよ。」

「注1：蹴ります。今すぐ。」

じよ、冗談だつて、冗談。

女性陣は俺のカバンから離れた小動物と戯れながら、気楽な感じで歩いている。

「お、どうやらいそいだ。みんな止まって。」

神様がそんな事を言い出した。しかし見える範囲に特に以上はない。後ろを振り返ると、やはり神様以外は誰も分らないようだ。

「えと、神様、どの辺りですか？」

「500mほど進んだ所で水飲んでるのかな、森からは出てきてるよ。恐竜なのは間違いないけど、何かまではまだ遠くて判断できないな。」

何故分かるんだろう、神様は変態神様だがフィールドでは高性能だな。

まあいい、久しぶりの恐竜だ血が騒ぐ。

先に行くぜ！

俺は剣を抜き、一気に駆け出す。もちろんカリシユも遅れずについて来る。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！全員で移動しないと危ないって。」

「注1：そうです、無謀です。」

「ええい、とりあえずみんな行くぞ。神様はできるだけ安全な場所にいて下さい。」

後ろで何か騒いですが、もちろん俺は無視する。

よし、見えた。こいつはでかいな。

「カリキ、あれ何か分かるか？前にフィールド狩りしたことある？」

名前なんか知らん。でも倒せばいいだけさ。

「それもそうだな！」

俺はさらに加速し、のんきに水を飲んでいるそいつに向かって一気に間合いを詰めていく。

後50mといった所で、そいつは俺に気がついたようだ。全長は俺の3倍強、6mといった所か。

『グオグオ』

威嚇か？しかし気にする事はない。短い前足と太い後足を持つそいつはまだ体制の整ってない。

先制は頂きだぜ。

うおおらああ

俺は少し遠目から走る速度とパワーを乗せた愛用の剣を振り下ろした。

《ぐぎいん》しかし、右前足に命中した俺の剣は僅かに食い込んだ後弾き返された。ちい表面が硬い。

「ああああああ”あ」

カリシュが左から大斧を水平に薙ぎ払うように振り回した。

《ザッシュウ》カリシュの大斧は俺と違い弾かれること無く左前足の半ばまでめり込み止まった。
切り飛ばす所まではいいないが確実にダメージは与えた。

『ギヤグオグギヤオ』

そいつが痛みのためだろう叫び声を上げて暴れだす。
それは半ばめり込んだ大斧を持ったままのカリシュにとって不幸だった。

大斧ごと振り回され、そして数メートル吹き飛ばされる。

丁度そこに後続の3人が到着した。

ベルサリアはカリシュの治療。マーリツシュは魔法・・・は使えないんだな、神様達と合流しろ。
バツカスは俺のサポート頼む。

『ギヤオグギヤオ』

新たに増えた敵に警戒しているのか、そいつは後足を踏み鳴らしながら後続の3人を見ている。
よそ見してんじゃねえ。

うらあああ

切りが効かないなら突く。右側面に回りこんだ昔習った教えをそのまま実行した。

俺は魔法さえ使えばおそらく一撃で型がつくのだが、そうは問屋が降ろさないのだ。

《ズグ》横つ腹の皮が薄い部分にうまく命中したらしく剣先が10cmほど突き刺さった。

「ほー、デイロフォサウルスですか。DランクLv3の肉食恐竜。みなさん牙と尻尾に気をつけなさい。パワーがあります」
近くまで来た神様が忠告してくれる。

『ギャグオグギャオ』

剣が刺さった新たな痛みを感じたのだろう、こいつデイロフォサウルスが再び激しく暴れる。

ちい

俺はその激しい動きに耐えられず思わず剣を離してしまった。不覚。デイロフォサウルスは剣を腹に刺したまま、距離が少し離れてしまった俺を無視して、倒れているカルシュとそれを治療しているベルサリアの方へ走り出す。

ヤバ、意外と早い。

その前にバツカスが割り込こんだ。

『グギャグギャ』

バツカスが正面から振り下ろした大剣を横にステップしてかわすデイロフォサウルス、巨体のくせに動きが鋭い。

バツカスの横を抜けたデイロフォサウルスはカルシュとベルサリアも無視して、更に後方、ほとんど無防備な3人に向かっていく。

バツカスも素早く反転して追うが、デイロフォサウルスのほうが早い。

やべえ・・・と思った瞬間

『ターン、ターン』

蒼天へ突き抜けるような渴いた音が2つ響いた。

デIFOオサウルスがその動きを止める。と次の瞬間には首と胴体の部分から鮮血が吹きだした。

そして、その正面に居たのはバリラン・ツインショット・ライフルを構えた神様だった。なんかカッコいい。

「FPSって超久しぶりだけど、やれるもんだねえ。」
「なんすか、それ？」

第六話 ｖsデIFOオサウルス その1（後書き）

デIFOオサウルスの表皮はクロコダイル並みという設定です。

神器はプレイヤーのユニークスキルでのみ作れる近代兵器です。

ただし魔力付与が出来ないのでダンジョンだと要無し、微妙です。

バリラン・ツインショット・ライフルは架空の2弾式大口徑ライフル（という事においてください）

戦闘描写・・・へボすぎる

次回、まだ続くvsデIFOオサウルス

結局出てこなかったオーリントイスの実力は？

変態神様が色々な意味で無双

更新は書けた時に、ということ結構ランダムです、申し訳ありません。

誤字脱字の指摘やその他感想などもお待ちしております。

第七話 くすディロフォサウルス その2 (前書き)

残酷成分多めです。

第七話 ｖsデIROフォサウルス その2

「油断しない方がいいよ、まだ致命傷には程遠いから。」

神様の声で俺は神様に向けてた視線をデIROフォサウルスに戻した。確かに動きは止まっているが倒れる様子はなさそうだな。

『グルウウ、ギャオギャオ』

そうこうしている間にデIROフォサウルスは痛みを振り払うかのよう
に激しく体を左右に動かし、足をかき鳴らす。

そしてデIROフォサウルスが再び突進をしようとした、その時

「はああああ」

《ドカツ、ギイン》追いつがったバツカスが尻尾へ激しく斬りつけ
る。

斜めから切り下ろされた大剣は見事に肉を半ばまで切り裂き、そこ
で硬い骨に阻まれる。

だがバツカスの動きはそこで止まらない。カリシュと俺の様子を見
ていたのだろう。

「おおおおおおお」

再びデIROフォサウルスが暴れる前に、力任せに大剣を引き抜くと
その力が逃げないように一歩下がりがながらうまく体を反転させ大剣
を頭上で回す。

「はあああああああ」

そしてそのまま今度は左後肢の指へ向けて大剣を斬り下ろした。

《ガシュ》見事に3本あるうちの一番外側にある指をブチ切る大剣。「っしゅあ」と思わずバツシュが歓喜の叫びを上げるのは当然だろう。

しかし、バツカスの2撃には何も感じていないかのように無視し、デイロフォサウルスは神様の方へ向かって走りだす（神経節の関係で先端部分は超鈍感ですからね）

俺は無手の上にまだ追いつけてない、カリシュはようやく身を起こそうとしている所で、バツカスは一瞬で大きな力を振り絞ったため硬直中だ。

『グオグオグオ』

残り5mを僅かに2歩で制覇したデイロフォサウルスはその巨大な口をあけ3人に襲いかかる。

「離れなさい。」

至極冷静にポーリとマーリッシュを左右に突き飛ばす神様。いやそこはポーリに守られくれよ、と叫びたい。

掬い上げるように迫る下顎、神様の両足に突き刺さる牙、そのまま振り上げられる首、斜め上空へ吹き飛ばられる神様とバラバラに飛ぶ両足と、その傷口から盛大に撒き散らされる鮮血。

まるでコマ送りのようなその光景を俺たちは見つめることしかできない。

《かみさまー》

そして全員が絶叫。

「あっはは、痛い、痛いねえ、イイヨイイヨ。これだよ！これじゃなきゃ僕は感じない！！ほらほらお返しだよ。あっはっは」

それに被せるように神様の逝っちゃった言葉と『タン、ターン』と再び蒼天へ突き抜けるような渴いた音が響き渡る。

神様はバリラン・ツインショット・ライフルを撃った反動で絶妙にバランスを取りトンボを切るように一回転して地上に降り立つ。

デイロフォサウルの右目と首の右上から吹き出す鮮血。

それとは対照的に神様の両足は何事もなかったかのように傷ひとつ付いていない、ズボンさえ元通りだ。

「ほらほらみんな、ボーっとしてるんじゃない。止めさしな。」

まだ状況を全く理解出来ない頭とは別に、その言葉に体が反応する。一気にデイロフォサウルの懷まで走りこみ、腹に刺さったままの剣を握りながら口が自動的に呪文を紡ぎだす。

我まといしは魔を切り裂く光の雷。剣に宿りて全てを切り裂きし刃となれ

フィールドで魔法が使えない、あもちろん魔法は発動しない。がそんな事はこの時の俺にはそんな事は意識していなかった。

うわらああああ

剣をそのまま横に引こうとする。しかし魔法が効力を表さず、切れ味の上がないままの剣ではそんな事はほぼ不可能

だつたはずだ。

「うるうああるあるあ、らるあう”るあ」

しかし同時に聞こえる小動物の鳴き声、その口から吐き出される紫光。そして剣に雷がまとわりつく。

硬いデイロフォサウルスの皮膚と肉をいとも容易く横一線に切り裂いていく俺の剣。

肉が切れる落とすさせず、2mほどある厚みを切り取り落とす。

そしてついにドウツつと横倒しに倒れるデイロフォサウルス。

「ダアアアア」

鬼の形相で大斧を担ぎ猛ダツシュしてきたカリシュは、神様のピンチでスキルパワーが最大値に引き上げられているのが見て取れた。凄まじい速度で倒れたデイロフォサウルスの首に振り下ろされる大斧。

《ドズシャー》切り飛ばされた首から大量に溢れ出すデイロフォサウルス血が俺たちの勝利を物語っていた。

「やれやれ、もう少し噛み噛みして、僕を感じさせてくれても良かったのになー。」

えと、神様？どついう事なんでしょうか？

第七話 ｖsデトロフオサウルス その2（後書き）

短めですみません。

とりあえずデトロフオサウルス戦終了です。

色々まあ神様あれな回でした。

次回、解体解体、恐竜の肉って食えるんですよね

オーリンティス君も何かします。

神様の秘密・大後悔（ただの不死なんです） 表記ミスではありません
せん

今夜にはもう一話アップできるかと思っています。

更新は書けた時に、ということで結構ランダムです、申し訳ありません。

誤字脱字の指摘やその他感想などもお待ちしております。

第八話　く解体中、だがこれから素手で戦うのか？（前書き）

ソフト、だと思います。たぶん

第八話　く解体中、だがこれから素手で戦うのか？

「いつも言ってるけどね、僕は神で不老不死、すなわち不死身なんだよー。信じてなかった？」

不老不死なのは知ってるが、『よくダンジョン行く死んじゃうー』って言うてるよな？

「モンスターはダメ、マジ死ぬ。フィールドの生き物なら余裕。痛いけどねー、ああ刺激があってキモチイイ痛みだったけど、イクには足りない。まだ足りねえー。もう少し生殺しにして、目の前で裸になって俺を食うように仕向けるんだった、ホント残念だよ。」

反応する事すら辛い。

俺以外もその状況を想像したのか青い顔で俯いてるような状態だ。

「まあ、まだチャンスはあるだろうし、いいか。」
よくねえよ。

「よし、とりあえず気を取り直して、こいつデIROフォサウルス解体して素材に分けるぞ。肉は食用、皮・内臓は防具素材、骨・牙・爪は武器素材になるからな。無駄にすんじゃないぜ」

陣頭指揮をとるバツカス。そうそう、恐竜に無駄な所などないのだ。

「カリシユ、とりあえずこの喉の辺りから尻尾の付け根まで軽く切ってくれ。内臓傷つけないようにな。」

「えー、こいつ堅いし加減できねえよ。それよりカリキがやった方がよくね。さつき魔法使ってこいつの腹ざっくり切り裂いてたじゃん。」

あれ、俺魔法なんか使った？記憶にないな。

「そういえば、神様の方に気を取られて良く覚えてないけど、カリキ魔法使ってたよね？フィールドなの？」
ん？ベルサリアどうした、何がそんなに疑問なんだ。俺いつも魔法使ってるが。」

「注1：フィールドでは魔法は使えません。なので私は無力です。」
ふはは、使える俺は凄いな。あ、ここふんぞり返る所？

「そういう意味じゃないだろ。まあ良いけどよ。よし使えるんなら使ってくれ、そのほうが楽だし早い。」
ふふん、リーダーたる俺がその力を存分に見せつけてやるぜ。

我まといしは魔を切り裂く光の雷。剣に宿りて全てを切り裂きし刃となれ

で、一気に真つ二つにしてやるぜ

おりゃあああ

《グイイイイン》…………

…………

「えっと、折れたね。」
「見事に折れたな。」

「注1：破片が明後日の方向に行ってくれてよかったです。」

「ああ、どうするんですか、カリキさん。そんなポツキリ折れちゃったらもう直せませんよ！」

「バーカリキ、バーカ」

.....

なぜに？

「ふむう、仕方ないな、やっぱりカリシュ頼むわ。リーダーはやっぱり周囲の警戒頼む。」

ああ俺の剣。そろそろちょっとヤバイかなとは思ってたが、こんな所で折れるなんて。

俺はこの先一体どうすれば・・・

ズーン

と効果音付きで落ち込む俺。

「あー、ほら、あれだ。こいつの骨から武器作れっからさ、それを使えば問題ないだろ。」

おお、そうかそうだな。元々リーダーの俺が一番に武器作る予定だったし（自分の中だけです）

何の問題もなかった。ふはははは、俺の強運を見たか。

「ま、いいけど。ほらほら早く解体してよね、夕食用のお肉なんだから。」

「注1：ベル姉様に凍らせてもらえば保存もOKなのです。早く切り出すのです。」

促されて渋々作業を始めるカリシュを俺はニヤニヤしながら眺めて

やった。ザマーミロ、はっはっは。

「注1：何一つ威張れることなど無いのです。バカリーダー。所で何故魔法失敗したのです？」

フィールドって魔法使えないからだろ。使えなくて当たり前だ、そんな事も知らんのか？

「はあ、元に戻ってるじゃない。じゃあディロフオサウルスのお腹切り裂いた時に発動してた魔法はなんなのよ？」

そりゃあれだ、俺が魔法唱えて発動したからだ。

一同《・・・・・・・・・・・・・・・・これどうする？》

「つく、まあいいわ。ってオーリンティス何食べてるの!？」

ベルサリアがいきなり顔色を変えて叫ぶ。

視線を追ってみると小動物が棒みたいなものを咥えてモゴモゴやってた。

・・・・・・・・!？それって指？

「ああ、ちよつと、ちよつと待って。爪かじったら素材が台無しになりますよ。リーダー、オーリンティス

止めて下さい!。」

ポーリの言うとおり恐竜の爪は立派な武器の材料だ。

あれ、なんかヤバイ？

おい、やめる小動物。さっき赤いの食ったばかりだろ、食い意地はりすぎだぞ。

ほら離せって!!

俺は指の切り口の方を持ってブラブラしてみる。離さない。ムリに

引っ張る、やっぱり離さない。

またこのパターンかよー！！

待てよ？さつきはスキル発動した俺を噛むことが出来なかった。その程度で恐竜の爪って食えるのだろうか。

「うるううううるううう」

なんか嬉しいのか楽しいのか、そんな感じの鳴き声を喉の奥で鳴らしながらモゴモゴしている。

見ていると少しずつ指が短くなっているようだ

って、やっぱり食ってるじゃん！

ほら、ホント離せよ。

ペチン

額っぱい所にデコピンをかましてみる。

「るきゅう」

痛そうだ、だが離さない。おまえ食い意地はりすぎ。オーリンティスのくせに生意気すぎる。

そうこうしているうちに、指一本がオーリンティスの腹の中へ収まってしまった。

「仕方ないです。まあこれだけ大型の恐竜なら十分な素材が取れると思いますから、指一本ぐらい問題ないはずです。売ったら3万ギ

ルダは下りませんでしたけど、大丈夫です。
全然大丈夫じゃねー

グダグダと4人と1匹で話している間に、バツカスとカリシュが完璧にデフロフォサウルスを解体していた。

具体的にいうと、内蔵を引きずり出し、皮を剥いで肉を切り出す。ここまでで1時間以上かかっている。お疲れ様だな、うんうん。

後は、これを洗って干して乾かせば完璧だ。

第八話　く解体中、だがこれから素手で戦うのか？く（後書き）

まだ誰もオーリンティスの能力に気がついていません。

目撃したのはカリキだけですが、彼の脳みそには入ってないようです。しかしオーリンティスは食欲旺盛になってしまったなあ。

次回、ポーリ君の鍛冶講座、余った肉は冷凍保存

果たして素手のバトルはあるのか？

忘れられた（無視された）変態神様の命運やいかに

更新は書けた時に、ということで結構ランダムです、申し訳ありません。

誤字脱字の指摘やその他感想などもお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9258y/>

グランディラファミリーの探索記

2011年12月5日20時49分発行